八尾市文化財調査報告６０
平成２０年度国庫補助　高安古墳群等調査事業

高安古墳群　調査報告書

出土遺物整理調査

服部川支群東側地区測量調査

２００９年3月
八 尾 市 教 育 委 員 会

郡川16号墳　出土土器（阿南辰秀氏撮影）

はじめに

八尾市の東側にある高安山の麓、「やまんねき」は、豊かな歴史遺産が残された地域です。なかでも、「高安千塚」といわれる高安古墳群集中地域には、６世紀代に造られた200基以上もの横穴式石室墳が残されており、わが国の古代国家の形成のありかたを考える上でも、大変貴重な遺跡です。

本市では、この貴重な古墳群を、やまんねきの里山・自然とともに、次世代に残していくために、国史跡指定を視野にいれた保存・調査事業を、文化庁国庫補助で、平成16年度から開始し、平成19年度までに詳細分布調査や、古墳群内の８基の古墳の市史跡指定と測量調査を行ってまいりました。

本年度は、平成19年度に本市に移管された高安古墳群の貴重な資料の整理調査と服部川支群東側地区の測量調査を行いました。本書はこれらの成果をとりまとめたものです。

これらの成果をもとに、今後は、八尾市の貴重な歴史遺産である「高安千塚」の保存・活用に向けた具体的な計画の策定を進めてまいります。

最後になりましたが、今回の調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成21年３月

八尾市教育委員会

教育長　中原敏博

例　　言

1．本書は、八尾市教育委員会が、国庫補助事業（重要遺跡確認・保存目的）で行った高安古墳群等の出土遺物整理調査及び服部川支群東側地区の測量調査の報告である。

2．調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長　岸本邦雄）が主体となって行った。

　出土遺物整理調査では、遺物の移管にあたって、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、東大阪市立郷土博物館のご協力をいただいた。また、東大阪市教育委員会若松博恵氏、東大阪市郷土博物館中西克宏氏にご尽力をいただいた。さらに整理調査においては、藤井直正氏、原田修氏に当時の調査についての貴重なご教示をいただいた。また、伊藤幸司氏、川瀬貴子氏、木許守氏、花田勝広氏、安村俊史氏に、出土遺物についての貴重なご教示をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。

3．服部川支群東側地区の測量調査にあたっては、土地所有者の方々をはじめ、服部川地区の方々に多大なご協力をいただいた。また、測量図の使用にあたって大阪府八尾土木事務所、大阪府教育委員会、(財）八尾市文化財調査研究会のご協力をいただき、大阪府教育委員会三宅正浩氏、亀島重則氏、(財）八尾市文化財調査研究会成海佳子氏にご尽力いただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます

4．調査及び調査計画については、「高安古墳群と山麓の古墳保存調査計画検討会議」の白石太一郎氏、増渕徹氏、一瀬和夫氏、高橋照彦氏、花田勝広氏、安村俊史氏、若松博恵氏、森屋直樹氏、岡田賢氏、八尾市文化財保護審議会委員村川行弘氏、井藤徹氏のご指導をいただいた。

5．巻頭写真は、阿南写真工房　阿南辰秀氏の撮影である。

6．服部川支群東側地区の現地測量・図面作成は、株式会社相互技研に委託した。

7．図版9の遺物写真は、八尾市立歴史民俗資料館に提供いただいた。その他は調査担当者による撮影である。撮影にあたり（財）八尾市文化財調査研究会高萩千秋氏、尾崎良史氏のご助力をいただいた。

8．整理調査は、調査補助員として、リスト作成作業を松江信一が、復元作業を川村一吉が行い、実測と製図作業を森暢郎・山中良平（以上大阪大学）が、実測作業を志田真吾（龍谷大学）が行った。

9．出土遺物のうち観察表の作成は土器を森暢郎（大阪大学大学院）が、鉄器を山中良平（大阪大学）が行い、調査担当者が確認・補充した。

10．考察３の執筆は調査担当者との協議を踏まえて、大阪大学大学院、森暢郎が行った。

11．調査担当及び本書の編集・執筆は、考察３を除いて文化財課技師吉田野乃が行った。

本　文　目　次

Ⅰ．高安古墳群出土遺物整理調査報告……1

　１．整理調査の経緯……1

　２．整理調査の報告……3

　３．考察……30

Ⅱ．高安古墳群服部川支群東側地区測量調査報告……40

Ⅰ.高安古墳群出土遺物(昭和41年大阪府教育委員会調査)の整理調査報告

1．整理調査の経緯

本報告は、昭和41年に行われた大阪府教育委員会による「八尾市高安郡川群集墳分布・実測調査」において出土した遺物の整理調査報告である。この調査は、歴史的に重要な価値をもつ高安古墳群について、今後の開発等による古墳の破壊の事態に備えて、その実態を把握することを目的として行われたものである。調査の内容は高安古墳群全体の分布調査と愛宕塚古墳、服部川37号墳（府65号墳）、二室塚古墳（府93号墳）、郡川16号墳、垣内・教興寺10号墳（府181号墳）、垣内・教興寺11号墳（府182号墳）の実測調査である。その調査成果の概要は、下記の報告書において既に報告されている。

・大阪府教育委員会1966年『八尾市高安古墳群の調査－昭和41年度第１次郡川其他地区調査概要－』
・大阪府教育委員会1968年『八尾市高安群集墳の調査（第２次）－昭和42年度服部川其他地区調査概要－」
・大阪府教育委員会1970年『高安古墳群調査実測図』

この調査によって出土した遺物は、長く東大阪市立郷土博物館で保管されてきた。このうち愛宕塚古墳出土遺物は、昭和63年に大阪府教育委員会に移管され、平成５年度に八尾市立歴史民俗博物館で整理調査が行われ、報告書が刊行された（八尾市立歴史民俗資料館1994）。その他の遺物については、引き続き東大阪市立郷土博物館で保管されていた。

その後、八尾市教育委員会では、「高安古墳群と山麓の古墳保存・活用事業」として、平成16年度から高安古墳群集中地域（高安千塚）の基礎的な調査を開始した。このなかで、高安古墳群集中地域においては、ほとんど発掘調査が行われておらず、出土遺物の実態が不明ななかで、昭和41年の大阪府教育委員会による調査で出土した遺物は、貴重なものであることから、これらを整理調査し、今後の事業に活用することとした。このため、平成18年度に大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会と移管についての協議を行い、平成19年３月に八尾市教育委員会に出土遺物の譲与を受けたうえで、平成19年４月に、東大阪市立郷土博物館から八尾市教育委員会に移管を行った。出土遺物の内容は下記のとおりである。

・　服部川37号墳（府65号墳）出土土器少量・鉄釘・耳環
・　二室塚古墳（服部川25号墳・大阪府93号墳）　出土土器少量・鉄釘
・　郡川 16 号墳出土土器（コンテナ３箱分）・鉄器・鉄釘・耳環
・　教興寺寄贈土器（黒谷13号墳出土土器）（コンテナ１箱分）
・　垣内・教興寺17号墳（大阪府177号墳）出土土器少量
・　垣内・教興寺10号墳（大阪府181号墳）出土土器少量
・　高安古墳群内出土土器少量
・　愛宕塚古墳出土土器少量・鉄製品

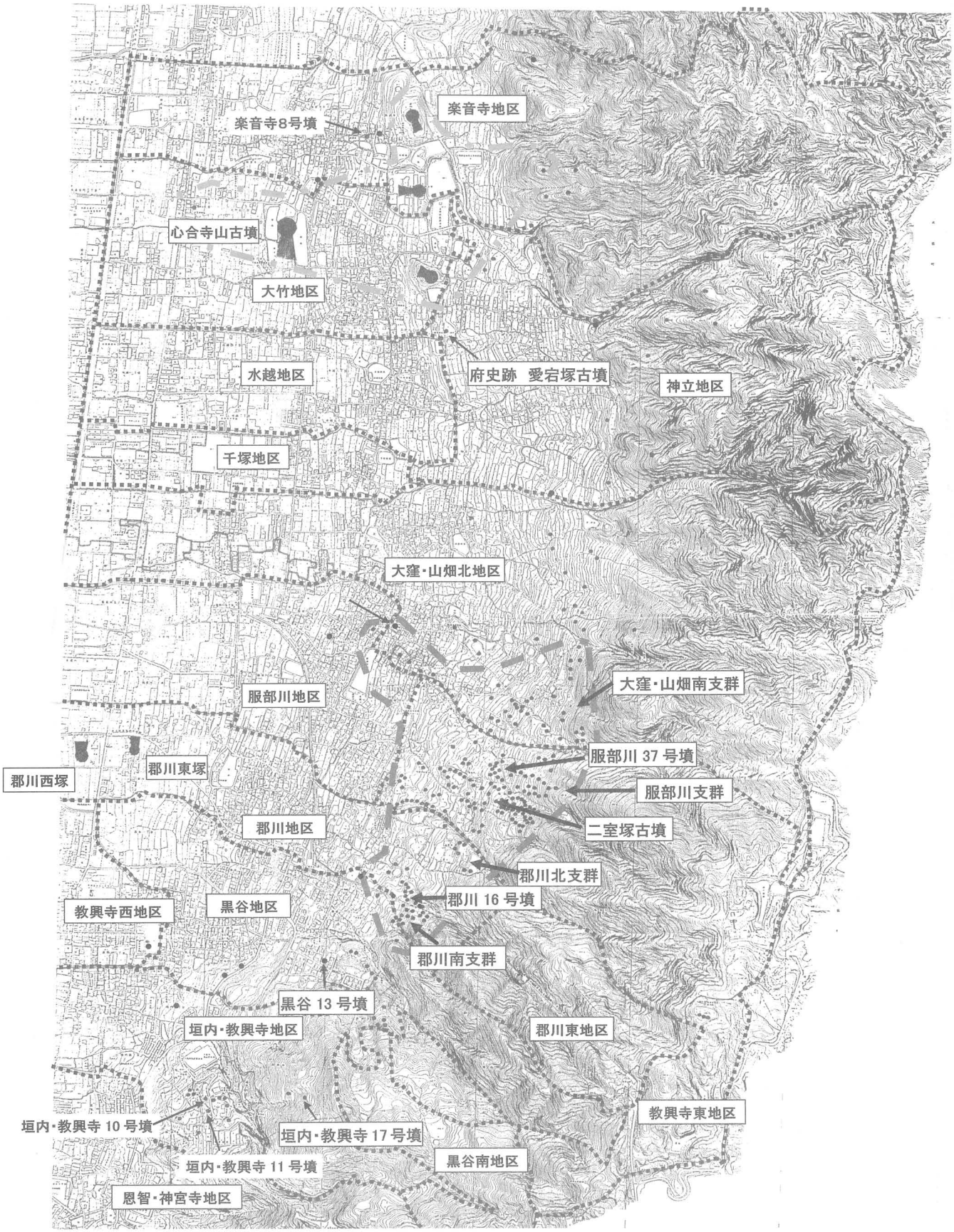
（以上、本年度報告）

・　心合寺山古墳出土　須恵器蔵骨器　１点
・　心合寺出土瓦（コンテナ１箱分）
・　高安出土石器（プラスティックケース３箱）

（以上、来年度報告）

本年度は、上記の遺物のうち高安古墳群と愛宕塚古墳の遺物について、実測・写真撮影を行い、報告を行う。心合寺山古墳・心合寺出土遺物、高安出土石器については、来年度に遺物整理報告を予定している。

(引用文献)
八尾市立歴史民俗資料館 1994『河内愛宕塚古墳の研究』



分布調査地区割り線

楽音寺・大竹古墳群

高安古墳群　集中地域（高安千塚）

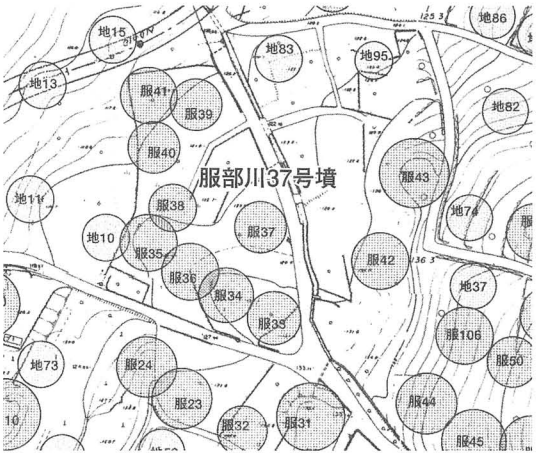
第１図　調査古墳位置図

2．整理調査の報告

(1) 服部川37号墳

現在、高安古墳群では、304基の後期古墳が確認されている。このうち「高安千塚」と称される高安古墳群集中地域については、平成15年度から19年度まで詳細分布調査を行い、225基の古墳と254地点の古墳状地点を確認している。高安古墳群集中地域は、服部川支群、大窪・山畑支群、郡川支群に大別されるが、このうち、服部川支群は最も多くの古墳が集中し、135基が確認されている。

服部川37号墳は、この服部川支群内に位置する右片袖式の横穴式石室墳である。



第２図　服部川37号墳位置図

[立地]

服部川支群の中央からやや北東寄りの標高125～130mの尾根上の緩傾斜面に立地する。付近の同一尾根上には、両袖式の横穴式石室墳である服部川42号墳、右片袖式の横穴式石室墳である同39号～41号墳等がある。

[墳丘]

墳丘付近一帯は、植木畑として利用されている。墳丘盛土は石室の左側壁側が天井石下端まで遺存している以外は大半が流出し、石室がドルメン状に露出している状態である。推定される墳丘の直径は、石室の奥壁付近が墳丘の中心付近であったとすれば、13.6m（石室現存長6.8m×２）である。また、墳丘の現存高は、石室の天井石の最大高では3.2mであるが、現状では墳丘盛土が流出しているため、本来はさらに高かったものと推定される。

[石室]

右片袖式の横穴式石室で、石室の全長は6.8mを測る。玄室は長さ４m、幅2.1m、高さ2.8m、羨道は長さ2.8m、幅1.5m、高さ1.9mを計る。開口方向は南西方向Ｓ－80°－Ｗである。玄室は平面プランは、長方形を呈する。石積みは玄室が５段積みで、袖部は立石の上に横長の石を積む。太田宏明氏の畿内型石室の分類の５群から６群に分類される石室であり（太田宏明2003)、花田勝広氏の高安千塚の石室の時期区分ではⅢ期、６世紀後半に位置づけられているものである（花田勝広2008)。

[調査時の状況]

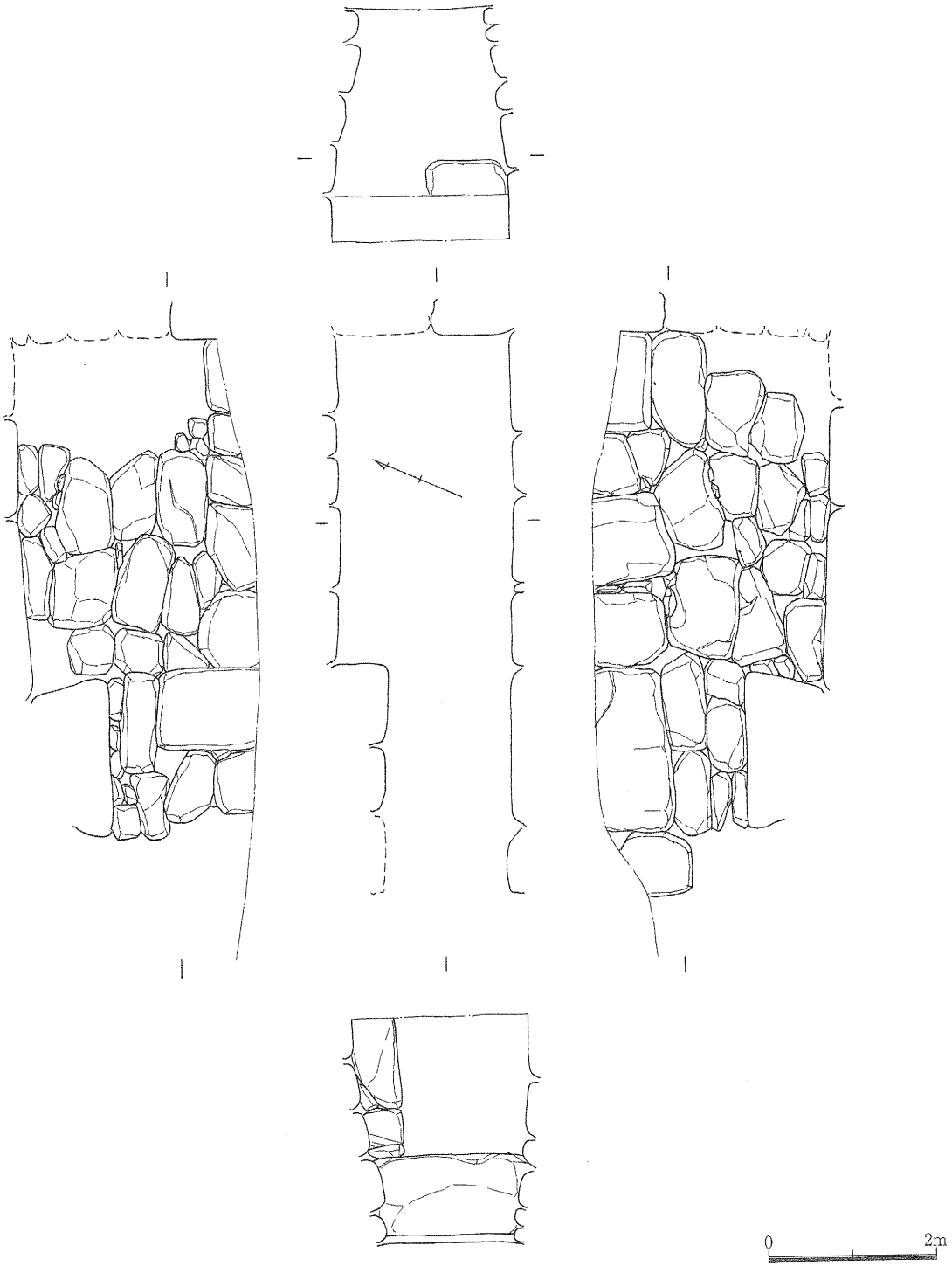
昭和41年度の調査時の石室の状況は、現状と同様で既に墳丘盛土がかなり流出していたようである。調査は石室の床面の清掃が行われた。調査報告には、石室内の攪乱がかなり大きく、ほとんど元の状態を残していない状況であり、攪乱された土の中から、鉄鏃、鉄釘をはじめとする鉄器、、耳環１点が出土し、玄室内には須恵器小片が多数散乱していたとされている。また凝灰岩のバイランした土が一面に残り、組合式石棺の収められていたものと推定されている。

羨道部には床面より高く石が敷かれ、閉塞石とも考えられるが明らかではないとされ、羨門から76cmの位置に、両側壁に接して須恵器の長頸壺が完形で出土したとされている。鉄釘の出土、凝灰岩片の出土から、木棺と石棺の両方が埋納されていたものと推定されている。

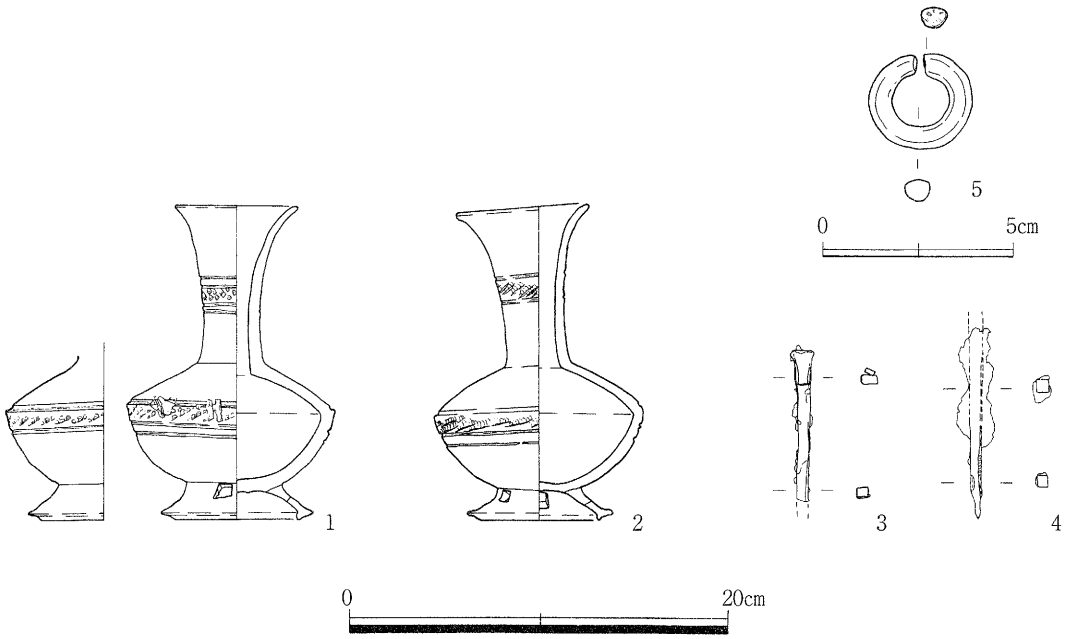
なお、今回移管した遺物には、鉄釘はあったが鉄鏃は見当たらず、鉄釘と誤認された可能性がある。

[出土遺物]（第４図）

１・２が上記の羨道から出土したとされる須恵器の長頸壺である。１・２とも完形品である。１は高さ16.7～16.8cm、脚台径6.7cm、口径6.3cm、２は高さ16.2～16.8cm、脚台径6.2cm、口径6.8cmを計る。頸部と体部にそれぞれ沈線とヘラ描き列点文が施される。脚台には長方形の三方スカシが施される。両者は、法量、器形、施文とも近似する。全体に丁寧な作りで、焼成も硬質であり、胎土も砂粒が少なく良である。１は体部のヘラ描き列点文の施文時に工具を当て損なったとみられる痕跡がある。本例の須恵器型式は、長頸壺部分についてはＴＫ48型式期、７世紀後半頃のものと類似するが、脚台部の三方スカシの存在がやや古い要素を示すものとみられる。このため判然とないが、７世紀前半から中頃の時期のものと考えておきたい。



第３図　服部川37号墳石室実測図（１／80）
（花田勝広氏2008「高安千塚の基礎的研究」より転載）



第４図　服部川37号墳遺物実測図

番号	器種	部位	径（cm）	現高（cm）	調整	色調	焼成	胎土	残存率（%）	備考
1	台付長頸壺	口縁～脚台部	口径 6.3 脚台部 6.7	16.7～16.8	外面－ロクロナデ・肩部はロクロナデのち不定方向ナデ　体部下半はロクロヘラケズリのちロクロナデ　内面－ロクロナデ	淡暗青灰色	硬	良（直径3mm以下のレキを僅かに含む）	完形	外面は沈線と列点文で施文（頸部の列点文は3つの点よりなる文様を24個・体部は同文を38個）するが、体部の列点文は一部施文時に剥ぎ取れている。脚台部は方形三方スカシ
2	台付長頸壺	口縁～台部	口径 6.8 脚台部 6.2	16.2～16.8	外面－ロクロナデ・肩部はロクロナデのち不定方向ナデ　体部下半はロクロヘラケズリのちロクロナデ　内面－ロクロナデ	暗青灰色	硬	良（直径4mm以下のレキを僅かに含む）	完形	外面は沈線と列点文で施文（頸部の列点文は3つの点よりなる文様を20個・体部は同文を28 個）する。脚台部は方形三方スカシ

服部川37号墳出土土器観察表

番号	種類	部位	現存幅（cm）			現存長（cm）	身部断面（cm）		断面形	木質の状況	備考
			頭部径	最大幅	最小幅		長辺	短辺			
3	鉄製棺釘	頭部～身部	1.1	1.1	0.6	8.1	0.6～0.9	0.5～0.6	正方形～長方形	身部の一部に残存・木目は釘長軸に対し縦方向。	頭部は1.8cm折り返している。
4	鉄製棺釘	身部～先端部	—	（身部）0.7	（身部）0.2	10.1	0.7～0.6	0.7～0.6	正方形	身部の一部に残存。先端部から2.8cm分は長軸に対して平行方向、これより上1cm分は釘長軸に対し直交方向。	

服部川37号墳出土鉄製棺釘観察表

これらは出土須恵器の時期や羨道からの出土であることから、羨道部における追葬に伴う副葬土器と判断される。

第４図３・４は木棺の板材を結合する鉄釘である。３は遺物とともにあった遺物カードに羨道中央の出土と記されていたものである。頭部の幅1.1cm、残存長8.1 cmを計る。頭部は1.8cm折り返されている。４は遺物カードに羨道部棺台東出土と記されていたものである。最大幅0.7cm、残存長10.1cmを計る。表面には木質が遺存し、長軸に直交する方向の木目が見えるが、先端の2.8cm分は長軸に平行する方向の木目が遺存している。このことから、木目の方向が変わる部分が、木棺の板材を結合させた位置になるとみられる。

第４図５は石室の攪乱された土の中から出土したとされている耳環である。表面は美しい金色を呈している。縦方向の径2.45cm、横方向の径2.8cm、断面径0.6～0.7cmを計る。重さは15.5ｇである。開き部の接面には、側面の端部を折り畳んだ痕跡がみられる。また接面には、やや緑青が付着する。保存処理時の蛍光Ｘ線分析結果に基づく　伊藤幸司氏の所見（伊藤幸司2009）では、水銀の検出量が極めて少ないことを鑑み、「多量の金と銀・銅を検出した。この結果が表面の金色を呈している地金の組成を示しているのか、鍍金層とその下の素地の地金成分を示しているのかは判じ難いが、損傷部分の観察から判断すれば、前者であると思われる」とされている。

自然科学的手法を用いて耳環の製作技法等を検討された渡辺智恵美氏（渡辺智恵美1997）は、材質、製作技法から耳環をまず、中空・中実・無垢に大別されており、無垢のものは細めであるとされている。本例は、重さから中実とみられ、また径の太さからみて無垢とは考えられず、銅芯であったとみられる。渡辺氏の分類では、中実耳環には、中間層ありと無しのものがあり、中間層ありのものには、めっき（銅芯銀板張鍍金）・板・箔貼（銅芯金・銀板貼）、中間層無しには、板・箔貼（銅芯金・銀板貼　鉄芯錫板貼他）があるとされている。

このような所見を踏まえたうえで、伊藤氏の分析結果を考えると、本例は中実の銅芯金（金・銀・銅合金）板張製の耳環であった可能性が考えられる。肉眼観察においても、金色の表面層が剥落し、一部が銀色を呈しているといった部分は全くみられない。一部に錆茶色を呈する部分があるが、上から付着したものとみられるものである。伊藤氏の所見では、多量の金と銀・銅の検出結果が鍍金層とその下の素地の地金成分を示している可能性も示されており、このことから、銅芯銀張りで鍍金を施した可能性も残されているが、表面層が均一に金色を呈し、極めて依存状態が良好であることからも、中実の銅芯金（金・銀・銅合金）板張製の耳環であった可能性が高いと考えられる。

[まとめ]

本墳は、玄室の床面積が8.4㎡を計る高安古墳群集中地域では、中規模の石室である。この規模の石室は、集中地域では最も多い。石室の築造時期は、石室の形状や石積みのあり方から、６世紀後半に位置づけられるが、羨道から出土した２点の須恵器台付長頸壺の型式からみても、７世紀前半から中頃まで、長く追葬が行われたものと考えられる。また調査時の報告に凝灰岩がバイランした土がみられたということ、鉄釘の出土から、凝灰岩製組合式石棺と木棺の両者が埋葬棺として使用されたものと考えられる。そして鉄釘とともにあった遺物カードの内容から、木棺は羨道にも納められており、棺台とみられる施設があったことがわかる。

また出土した耳環は、中実の銅芯金（金・銀・銅合金）板張製の可能性の高い良質なものであり、初葬時の副葬品の一つであった可能性があり、高安古墳群集中地域の中規模の石室の副葬品内容にふさわしいものといえる。

（引用文献）

太田宏明2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第15号

花田勝広2008「高安千塚の基礎的研究」『高安古墳群の基礎的研究』八尾市教育委員会

伊藤幸司2009「金属製品の保存処理について」「平成19年度保存処理事業報告」『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会

渡辺智恵美1997「耳環小考－製作技法、材質からみた分類－」『元興寺文化財研究所創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所

（2）市史跡　二室塚古墳（服部川25号墳）

二室塚古墳は、服部川支群の中央、南東寄りに位置する横穴式石室墳であり、二室構造という特異な構造をもつ古墳である。また、明治時代に英国人の研究者であるウィリアム・ガウランドと米国人の研究者であるロマイン・ヒッチコックがガラス乾板による写真撮影を行い、いち早く海外に紹介した古墳である。

[立地]

北西方向に延びる標高133～140mの見晴らしの良い尾根上の緩傾斜面に立地する。付近の同一尾根上には、東側に服部川27号墳、同127号墳が、西側に服部川９号～11号墳が立地する。

[墳丘]

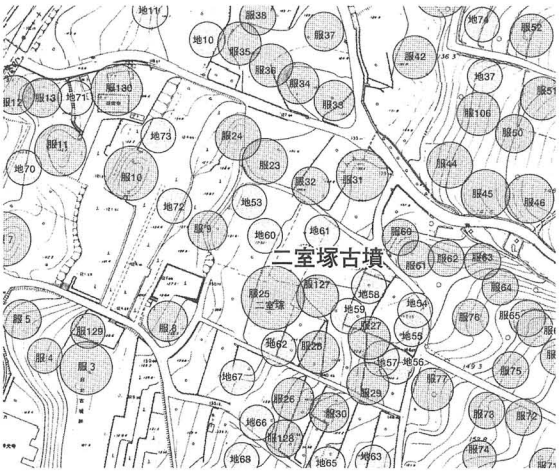
墳丘の石室上部付近は、雑木で覆われているが、周辺は開口部前面付近が平地であることを除いて、植木畑として利用されている。平成18年度の墳丘測量調査の結果（八尾市教育委員会2007）、高さ5.1m前後で、直径20m前後の円墳ないしは一辺20m前後の方墳の可能性が考えられた。墳丘の北東側裾には、右片袖式の横穴式石室墳である服部川127号墳が重なっており、測量図をみる限りでは、二室塚古墳が築造されたのちに服部川127号墳が築造されたものとみられる。

[石室]

畿内型の右片袖式石室を二つ繋げた二室構造の石室である。九州に多く分布する前室が狭い複室構造でなく、前室・後室とも埋葬を主体とする場として意図して構築されたものであり、高安古墳群集中地域郡川南支群の交互二室塚古墳を除いては、全国的にも類例のないものである。石室の全長は11.2m を計り、前室は長さ4.4m、幅2.4m、高さ3.2m、後室は長さ3.82m、幅2.3m、高さ3.05m を計る。開口方向は南西（S－56°－W）である。

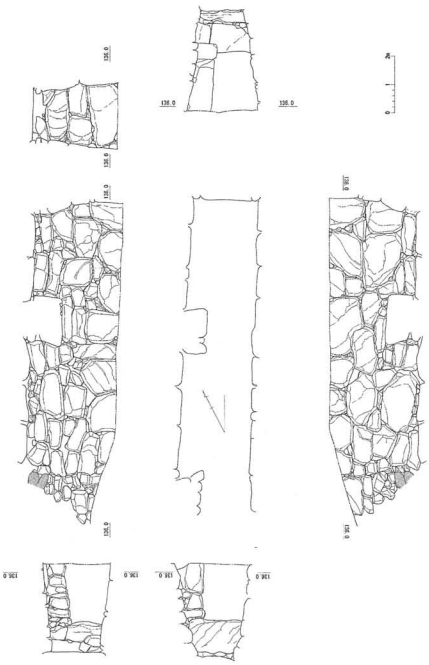
[調査時の状況]

昭和41年度の調査は、石室の床面の清掃が行われた。この時の状況は、床面には盗掘のために生じた穴が随所に見受けられ、ほとんど元の状態を残しておらず、敷石等も認められなかったとある。また前室と後室ともに床面に堆積する土の中から、凝灰岩の小片がみられたことから、石棺が納められていたものと考えられている。測量調査においても組合式石棺の底石とみられる二上山産凝灰岩片を採集している。また耳環２点、土師器･須恵器の小片の他は、ほとんど遺物は見当たらなかったとあり、盗掘等に



第５図　二室塚古墳位置図

第６図　二室塚古墳墳丘測量図



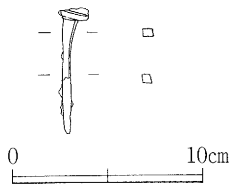
第７図　二室塚古墳石室平面図

よって持ち去られた可能性が考えられている。このうち、耳環については、前室から出土したとのことである（註１）。

今回移管した遺物は鉄釘１点、鉄釘の破片とみられる鉄小片５点、土師器小片４点であり、耳環２点、須恵器小片はみられず、所在が不明となっている状態であった。

［出土遺物］（第８図）

今回移管した遺物のほとんどが細片であり、実測できたのは、第８図の鉄製棺釘のみである。本例は円盤状の鋲頭部を取り付ける小型の棺釘であり、瀬川貴文氏の鋲頭型Ⅱ類に分類されるものである（瀬川貴文2005）。長さ6.6cm、鋲頭部残存径1.5cmを計る。釘身部は断面方形から長方形を呈し、上部の幅は0.6cm、先端部は0.3cmを計る。釘身部は、鋲頭部の中央ではなく、やや端に片寄った位置に取り付いている。木質の遺存はみられない。なお、本遺物については、平成19年度に保存処理を行った。



第８図　二室塚古墳出土鉄釘実測図（１／４）

［まとめ］

二室塚古墳においては、これまでの調査から二上山産凝灰岩製の組合式石棺が納められていたことが確認されている。今回確認した鉄製棺釘は石棺の他に釘結合式の木棺が納められていたことを示すものである。瀬川氏の検討によると、鋲頭型の鉄釘については、「遅れて使用され、ＴＫ43型式期に若干みられ、多くはＴＫ209型式期以降に使用される」とある。

二室塚古墳の石室は、二室構造という特異な石室ではあるが、前室・後室を個別に切り離して見れば、太田宏明氏の横穴式石室分類の畿内型石室６群に位置づけられるものとみられ（太田宏明2003）、６世紀後半頃の石室と考えられる。また、石室の規模からみると、主たる埋葬棺は石棺であった可能性が高いと考えられる。このことから、組合式石棺は、二室塚古墳石室の初葬時の埋葬棺であった可能性が考えられ、鋲頭型Ⅱ類の棺釘を使用した木棺は、６世紀末から７世紀初めの追葬時の埋葬棺であった可能性が高いと考えられる。

註１　調査に参加された原田修氏のご教示による。

（引用文献）

八尾市教育委員会2007『高安古墳群分布・測量調査報告書　大窪・山畑南地区詳細分布調査　市史跡二室塚古墳測量等調査他』

瀬川貴文2005「釘結合式木棺の受容と展開」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退官記念』

太田宏明2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第15号

（3）郡川16号墳

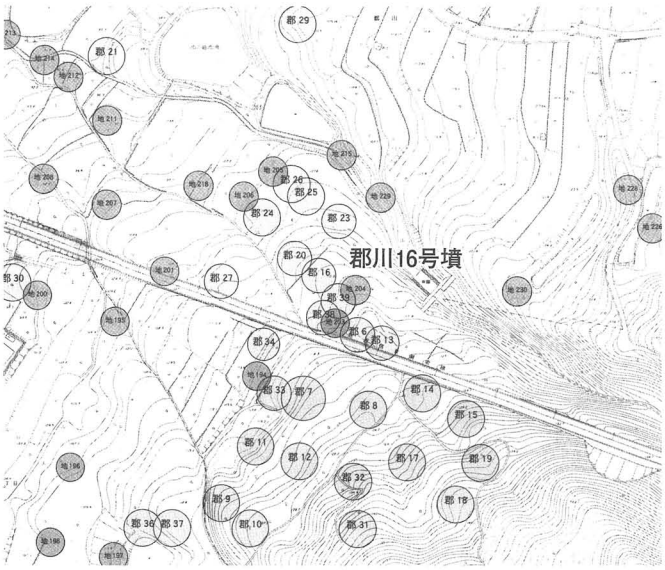
郡川16号墳は、郡川支群のうち南側の郡川南支群の中央から北東寄りに位置する。ドーム状の天井を有し、高安古墳群中で最古形式の横穴式石室をもつ古墳である。

［立地］

標高113～115mの尾根上に立地する。付近の同一尾根上には、東側に郡川38号墳、同39号墳、同６号墳、同13号墳が、西側に郡川20号墳、同24号墳が築造されており、同一尾根上に連綿と古墳が築造されている。

［墳丘］

墳丘とその周辺は、もともとは植木畑であったようだが、現在は雑木に覆われ、山林状を呈している。墳丘の現存直径は15m、現存高は3.5mを測る円墳であり、墳丘の遺存状況は概して良好である。墳頂部は石室の天井石が露出した状態となっているため、本来の墳丘の高さは、さらに高かったものと推定される。



第９図　郡川16号墳位置図

［石室］

右片袖式の横穴式石室で、石室の全長は8.2m、玄室は長さ3.9m、幅2.8m、高さ3.8m、羨道は長さ4.3m、幅1.4m、高さ1.6mを計る。開口方向は南西方向（Ｓ－20°－Ｗ）である。石室は玄室の平面形が方形に近いものであり、玄室幅指数（玄室幅÷玄室長）は0.72となる。羨道幅指数（羨道幅÷玄室幅）は0.5である。玄室の天井高は高く、ドーム状で持ち送りが顕著である。石材は全体に小振りなものが多く、基底石は50～70㎝前後であるが、上方にいくほど30～40㎝前後までの小型のものが使用されている。

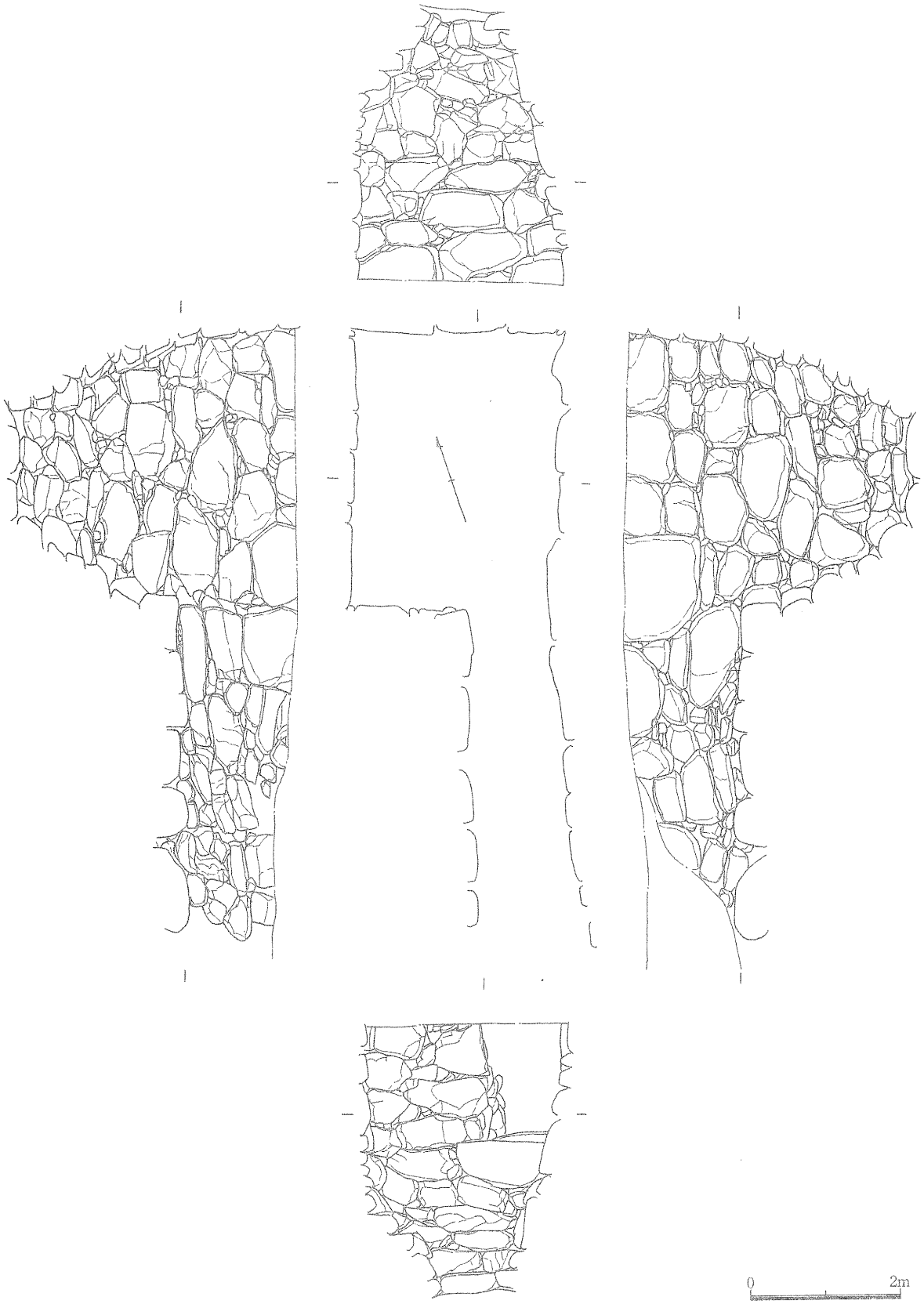
注意されるのは、羨道の取り付き方が玄室の主軸に対して奥壁からみて左側（東側）に振れている点である。このような特徴は、５世紀後葉の初期横穴式石室墳である柏原市の高井田古墳の石室の形状と類似する。高井田古墳の横穴式石室は、百済の横穴式石室に出自を求められ、畿内型横穴式石室の原点の一つとされる横穴式石室であり、郡川16号墳の横穴式石室への系譜を辿ることができると指摘されているものである（安村俊史2008）。郡川16号墳の石室の羨道の取り付き方にみられる特徴は、他の石室の特徴とともに、畿内型石室の初期の特徴を残しているものである可能性がある。

［調査時の状況］

昭和41年度の調査状況は「石室の羨道入口部はかなりの土砂堆積がみられ、一人がようやくもぐりこめる状態であり、玄室内はあまり堆積もなく、盗掘を受けている様子もなかった」とある。この状況は現況とさほど変わらないようである。調査によって「羨道入口部に閉塞石の残欠が残り、玄室の近くまで石材が散乱している状態を検出した」とある。また、玄室の最下段の石材は、地山に約15㎝程くい込ませて据えられているが、石室前面になるほど地山を次第に上り、しかも羨道中央部から入口部にかけての石材は、地山に接した状態で据えられていた」とある。

この記述や当時の石室実測図（第11図）をみると、調査では石室の床面を検出したものとみられる。そしてこの床面については、玄室部分は平坦であるが、羨道部分は羨門に向かって緩やかに上昇していたものとみられる。当時の調査状況について検証するすべはなく、やや不確定要素はあるものの、このような特徴は、高井田山古墳をはじめとする初期横穴式石室にみられる特徴の一つとして捉えられる可能性がある。このような事例は、高安古墳群周辺地域黒谷地区の黒谷10号墳の石室床面でも確認されている。黒谷10号墳は玄室の平面形が方形に近いプランを有するものであり（玄室長3.1m、玄室幅2.2m、玄室幅指数0.70）、ＴＫ10型式古段階の須恵器が出土している（高萩千秋2008）。郡川16号墳と同時期、あるいは直続する時期の横穴式石室墳とみられるものである。

遺物の出土状況は、「玄室内からは須恵器蓋・坏身、土師器小形丸底壺、不明鉄器、金環等が四壁に



原田修原図に加筆

第10図　郡川16号墳石室実測図（1／80）
（花田勝広氏2008「高安千塚の基礎的研究」より転載）

接して出土し、羨道部においては須恵器蓋坏身、土師器椀、把手付き小形壺、不明鉄器を検出した。ともに後世の攪乱を受け元位置を保っているかどうかは疑わしい。」とある。

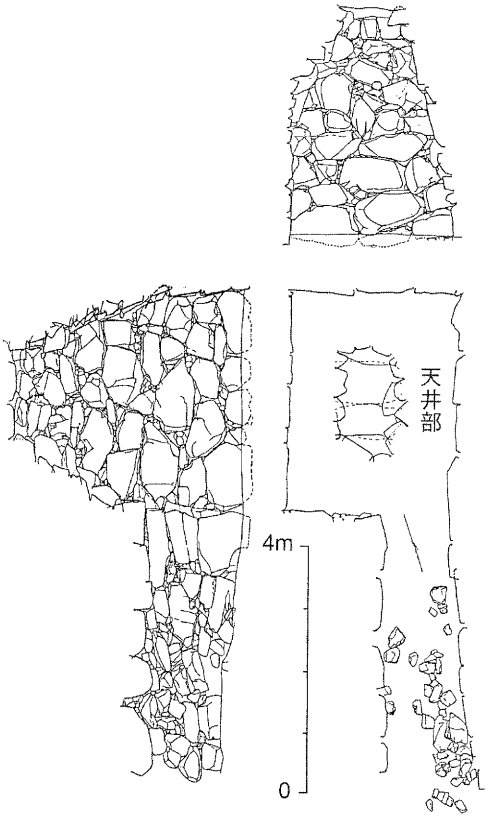
［出土遺物］

出土遺物の状況については、現段階では上記の記述のみしか知るすべがない。出土状況の写真や図も作成されたとのことであるが、現段階ではその所在が不明となっている。概要報告の記述と遺物とともにあったカードから判明する出土位置のわかる遺物は下記のとおりである。

・耳環（第15図）　玄室内壁面に接した位置
・土師器ミニチュア把手付鍋（第14図40）　羨道部
・土師器坏Ｃ（第13図39）　羨道部
・須恵器坏身（第12図６）　羨道部（遺物カード・ネーミング）

〈土器〉（第12～14図）

上記からは、土師器ミニチュア把手付鍋が羨道部から出土した可能性のあることがやや注意されるものの、追葬時における玄室内の初葬時の副葬品のかたづけなどを考えれば、羨道に副葬されていたと確定することはできない。このことから、８世紀頃の追葬あるいは墓前祭祀に伴うものと考えられる土師器坏Ｃについては羨道からの出土が理解できるものの、その他の遺物については、初葬時、追葬時の土器群の確認はできない。このことから、次に示したように、出土須恵器について型式別分類による土器のグルーピングを行い、初葬時、追葬時の副葬土器の推定を行うこととした。なお、須恵器の型式編年については田辺昭三氏の編年（田辺昭三1966）をもとにしている。



第11図　昭和41年度調査時の郡川16号墳石室実測図
（原田修1987論文より転載）

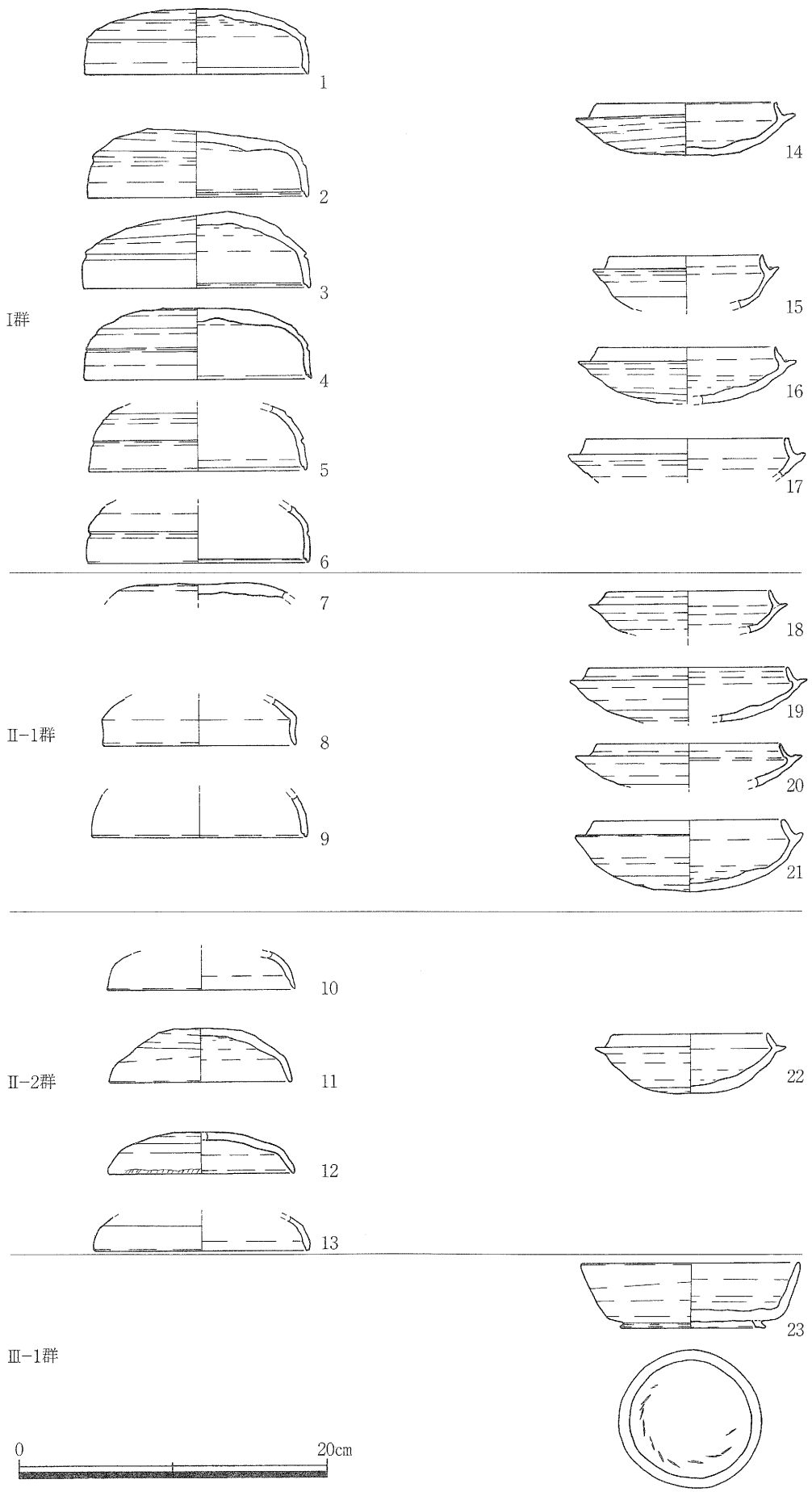
Ⅰ群・・・・・（ＭＴ15型式期）～ＴＫ10型式古段階期
須恵器坏蓋（１～６）・坏身（14～17）・短脚高坏（24）

Ⅱ－１群・・・ＴＫ10型式新段階（ＭＴ85型式）期
須恵器坏蓋（８）・坏身（18～21）・台付壺脚部（29）

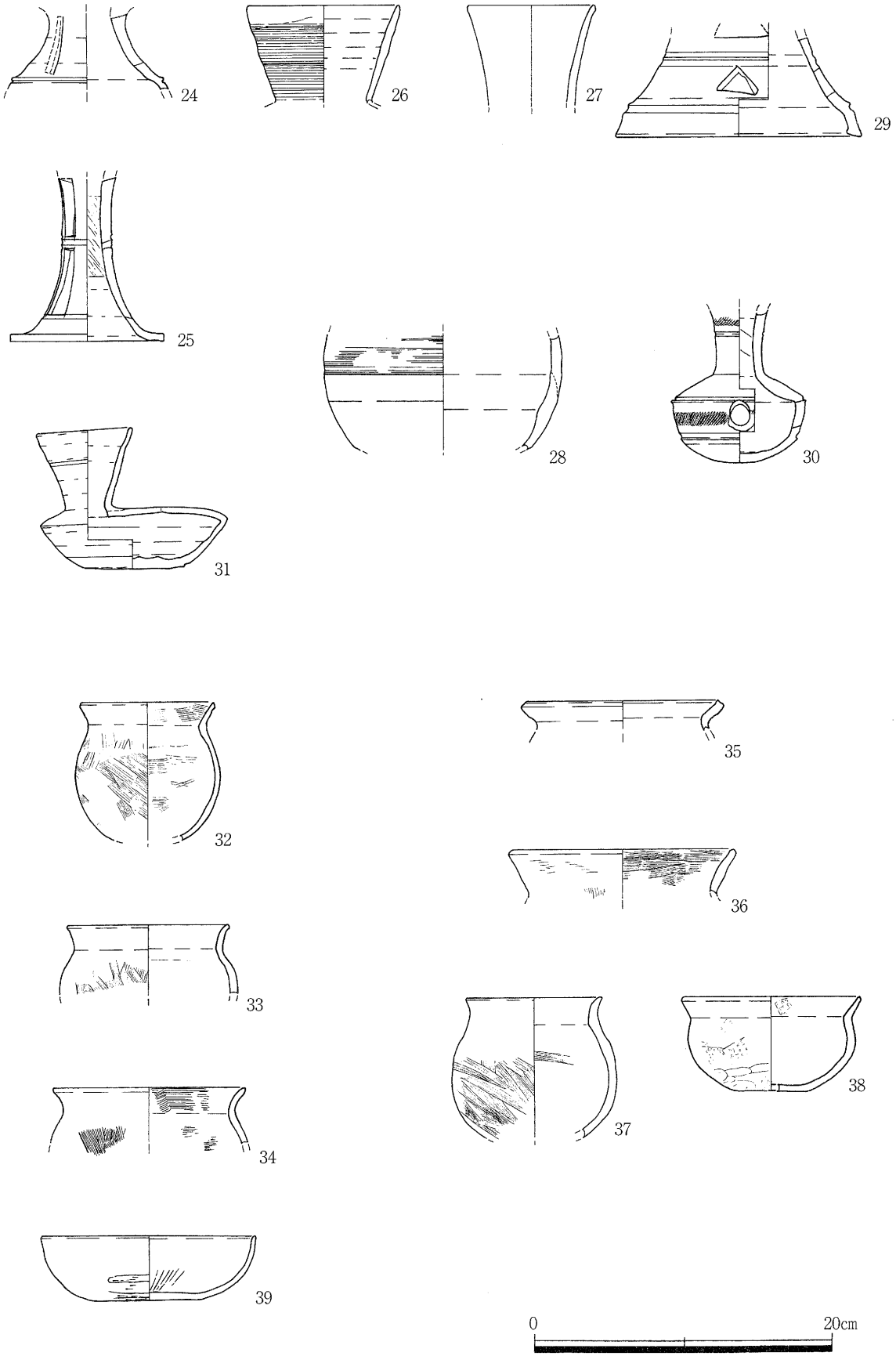
Ⅱ－２群・・・ＴＫ43～（ＴＫ209）型式期
須恵器坏蓋（10～13）・坏身（22）、長脚高坏（25）、甕（30）

Ⅲ－１群・・・ＭＴ21型式期
須恵器坏Ｂ（23）、（土師器坏Ｃ（39））

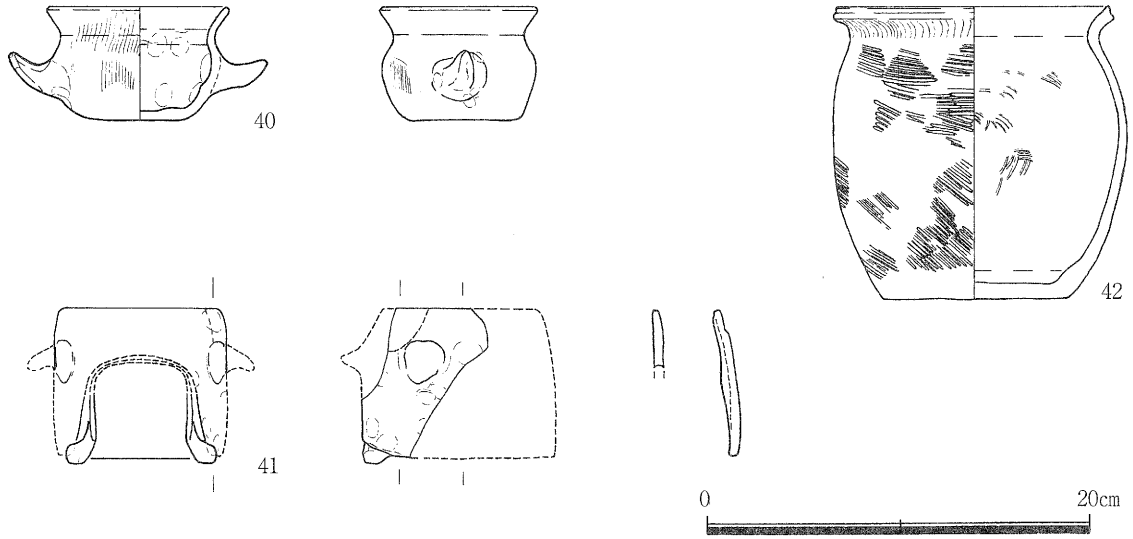
Ⅲ－２群・・・ＴＫ７型式期
須恵器平瓶（31）



第12図　郡川16号墳遺物実測図（1／4）



第13図　郡川16号墳遺物実測図（1／4）



第14図　郡川16号墳遺物実測図（１／４）

土師器については、ミニチュア鍋・竈セット（40・41）、韓式系平底鉢（42）、甕（32～35・37）、羽釜あるいは甕（36）、小型鉢（38）が、Ⅰ群に伴うものと考えた。40は焚き口の周辺に突帯をめぐらした形跡がないことから、曲げ庇系竈のミニチュアと推定されているものである（中西克広1999）。40のミニチュア鍋とセットとなり、両者とも角閃石を含む生駒西麓系の胎土とみられるものである。42の韓式系平底鉢は体部外面に平行タタキ、内面に同心円文の当て具痕がみられる。体部外面には頸部にもタタキによるとみられる縦の条線が遺存している。また体部外面に黒斑がみられる。36は、羽釜あるいは甕の口縁部であり、色調は茶褐色で生駒西麓系の胎土である。外面全体にススが付着する。38の小型鉢は体部外面から頸部内面に格子状のタタキ痕かとみられる痕跡があるが、全体に摩滅が著しく判然としない。体部外面下半はヘラケズリとみられる痕跡がある。38と形状や法量が類似する小型鉢は、高安古墳群周辺地域黒谷地区の黒谷10号墳で出土している。黒谷10号墳では、このような小型鉢７点が把手付コップ形土器１点とともに、玄室内北東隅からまとまって出土しており、出土位置からみても初葬時のＴＫ10型式期の須恵器に伴うものとみられ、郡川16号墳出土例と近い時期のものである。

上記の土器群について、Ⅰ群は初葬時の副葬土器、Ⅱ―１群は一回目の追葬時の副葬土器、Ⅱ－２群は二回目の追葬時の副葬土器、Ⅲ－１群は、奈良時代の墓前祭祀あるいは追葬時の第一回目の埋納（副葬）土器、Ⅲ－２群は同期の二回目の埋納（副葬）土器と推定した。

このことから、それぞれの埋葬時期は、初葬が６世紀の前半から中頃、追葬の第一回目が６世紀の第３四半期頃、追葬の第二回目が６世紀の第４四半期から末頃、奈良時代の墓前祭祀あるいは追葬時の第一回目の埋葬）が、８世紀の初め頃、同期の二回目が８世紀の中頃と推定される。

種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整	色調	焼成	胎土		残存率(%)(径計測部分)	備考
須恵器	1	杯蓋	口縁部～天井部	14.8	4.4	外面－天井部の4/5ロクロヘラケズリ。他はロクロナデ。 内面－ロクロナデ	青灰色	硬	良	直径3mm以下の砂粒を1%含む。	55	口縁部外面に自然釉付着
	2	杯蓋	口縁～底部	14.4	4.5	外面－天井部ほぼ全面ロクロヘラケズリ。他はロクロナデ 内面－ロクロナデ。中心部静止ナデ。	青灰色	硬	良	直径1mmの白色粒子を僅かに含む。	60	内面中央に静止ナデあり。
	3	杯蓋	口縁部～天井部	14.8	5.0	外面－天井部の2/3ロクロヘラケズリ。他はロクロナデ。 内面－ロクロナデ	青灰色	硬	良	直径6mm以下の砂粒を含む。密	100	天井部上面にヘラによる窪みあり。
	4	杯蓋	口縁部～天井部	15.0	4.7	外面－ロクロヘラケズリ＋ロクロナデ 内面－ロクロナデ・中心部静止ナデ	淡青灰色	硬	普通	直径3mm以下の砂粒を1%含む。		内面中央に静止ナデあり。
	5	杯蓋	口縁部～天井部	14.2	4.2	外面－天井部の4/5ロクロヘラケズリ。他はロクロナデ。 内面－ロクロナデ	暗灰青色	硬	普通	直径3mm以下の砂粒をやや含む。	10	
	6	杯蓋	口縁部～天井部	14.4	3.6	内外面－ロクロナデ	暗青灰色	硬	良	直径2mm以下の砂粒を僅かにに含む。	40	内面に僅かに焼けぶくれあり
	7	杯蓋	天井部		1.1	外面－ロクロヘラケズリ 天井部中央はヘラ切り痕とみられる痕跡あり 内面－ロクロナデ 天井部中央に同心円文スタンプ痕のち静止ナデ	暗灰青色	硬	良	直径2.5mm以下の砂粒を僅かに含む。	0	天井部中央に同心円文スタンプ痕、静止ナデあり。
	8	杯蓋	口縁部～天井部の一部	12.6	3.0	外面－天井部はロクロヘラケズリのちロクロナデ 内面－ロクロナデ	暗灰青色	硬	精良	直径2mm以下の砂粒を極く僅かに含む。	27	壺の蓋の可能性あり。やや焼けひずみあり。
	9	杯蓋	口縁部	16.0	2.8	内外面－ロクロナデ	淡青灰色	やや硬	普通	直径2mm以下の砂粒を僅かにに含む。	8	焼けぶくれあり
	10	杯蓋	口縁部	12.2	2.4	外面－ロクロナデ 内面－ロクロナデ	青灰色	硬	良	直径2mm以下の砂粒をわずかに含む。	10	
	11	杯蓋	口縁～天井部	11.8	3.6	外面－天井部の2/3はロクロヘラケズリ。他はロクロナデ 内面－ロクロナデ	青灰色	硬	やや粗	直径1～3mmの白色粒子を1%含む。	100	口縁部外面に自然釉付着
	12	杯蓋	口縁部～天井部	12.0	2.7	外面－天井部の4/5はロクロヘラケズリ。他はロクロナデ 口端部に5mm幅のケズリ痕 内面－ロクロナデ・中心部静止ナデ	暗灰色	硬	良	直径2mm以下の砂粒を少量含む。	30	口端部外面にキザミメあり。外面の一部に自然釉付着 内面中央に静止ナデあり。
	13	杯蓋	口縁部～天井部の一部	14.2	2.2	外面－天井部はロクロヘラケズリのちロクロナデ 内面－ロクロナデ	暗青灰色	硬	やや粗	直径3mm以下の砂粒をやや含む。	10	
	14	杯身	口縁部～底部	11.9	3.4	外面－底部の3/4はロクロヘラケズリ 内面－ロクロナデのち静止ナデ	青灰色	硬	やや粗	直径6mm以下の砂粒をやや含む	55	内面中央に静止ナデあり。
	15	杯身	口縁部～底部の一部	10.0	3.4	外面－ロクロヘラケズリ 内面－ロクロナデ	暗灰色	硬	やや粗	直径5mm以下の砂粒をやや含む。	10	自然釉付着
	16	杯身	口縁部～底部	11.6	3.7	外面－底部の1/2はロクロヘラケズリ 他はロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部中央は静止ナデ	青灰色	硬	粗	直径7mm以下の砂粒をやや含む。	25	内面中央に静止ナデあり。
	17	杯身	口縁部～体部	13.3	2.5	外面－底部はロクロヘラケズリ。他はロクロナデ 内面－ロクロナデ	暗灰色	硬	精良	直径1mm以下の砂粒を僅かに含む。	10	
	18	杯身	口縁部～底部の一部	10.8	2.8	内外面－ロクロナデ	淡暗灰色	硬	やや粗	直径3mm以下の砂粒をやや含む	20	
	19	杯身	口縁部～底部の一部	12.0	3.6	外面－底部の2/3はロクロヘラケズリ 他はロクロナデ 内面－ロクロナデ底部中央は静止ナデ	淡青灰色	硬	粗	直径5mm以下の砂粒をやや含む	20	底部にヘラ記号を持つ。底部外面に自然釉付着。内面中央に静止ナデあり。
	20	杯身	口縁部～体部	12.0	2.8	外面－底部はロクロヘラケズリ 他はロクロナデ 一部不定方向ナデ 内面－ロクロナデ	灰色	硬	粗	直径4mm以下の砂粒をやや含む。	10	
	21	杯身	口縁～底部	12.4	4.7	外面－底部の2/3はロクロヘラケズリ 他はロクロナデ 内面－ロクロナデ	青灰色	硬	良	直径1mmの砂粒を僅かに含む。	25	外面底部に自然釉付着
	22	杯身	口縁部～底部	10.2	3.9	外面－底部の1/2はロクロヘラケズリ 他はロクロナデ 内面－ロクロナデ 底部中央は静止ナデ	青灰色	硬	良	直径1mmの砂粒を僅かに含む。	35	内面中央に静止方向ナデあり。外面の体部から底部に自然釉付着
	23	杯B	口縁部～底部	14.2	4.3	外面－底部回転ヘラ切り 他はロクロナデ。底部～体部は下から上方向ナデ 内面－ロクロナデ	青灰色	硬	良	直径1mmの砂粒を僅かに含む。	95	底部に爪形圧痕がめぐる。やや焼けひずみあり。
	24	短脚高坏	脚部	10.8	5.1	内外面－ロクロナデ	青灰色	硬	普通	直径3mmの砂粒を少量含む。	30	長方形スカシあり

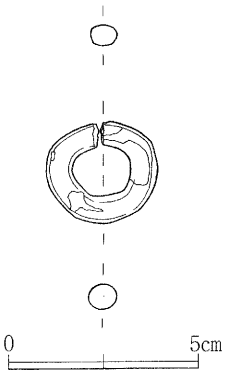
郡川16号墳　出土遺物観察表

	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整	色調	焼成	胎土		残存率(%)(径計測部分)	備考
須恵器	25	長脚高杯	脚部	10.3	11.1	外面ーロクロナデ　内面ー下部ロクロナデ、上部シボリメ	暗青灰色	硬	粗	直径7mm以下の砂粒を含む。	65	長方形2段3方透かしとみられる。
	26	壺	頸部	10.2	6.6	外面ーユビオサエのちカキメ　内面ーロクロナデ	暗灰色	良好	良	直径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む。	50	外面の上部に自然釉付着
	27	長頸壺	口縁部～頸部	8.5	6.8	外面ーロクロナデ　内面ーロクロナデ	黒灰色	硬	良	直径1.5mm以下の砂粒をわずかに含む。	25	内面に自然釉付着
	28	壺	体部	(最大径)16	7.8	外面ー体部上半はカキメのち一部不定ナデ　体部下半はロクロヘラケズリ　内面ーロクロナデ	灰白色	やや軟	良	直径3mm以下の砂粒をわずかに含む。	25	
	29	台付壺	脚部	16.2	6.9	内外面ーロクロナデ	暗青灰色	硬	やや粗	直径3mmの砂粒を少量含む。	30	三角形二段スカシ
	30	瓶	頸部～底部	肩部最大径9.2	10.3	外面ー頸部列点文　体部列点文　底部ロクロヘラケズリのちロクロナデ　その他はロクロナデ　内面ー肩部～頸部絞り痕　その他はロクロナデ	暗灰色	硬	やや粗	直径5mmの砂粒をやや含む。	60	注口部に使用痕とみられる剥離あり。底部にヘラ記号あり。外面の頸部から体部にかけて自然釉付着。
	31	平瓶	口縁～底部	口径6.4 底径6,8	9.6	外面ー底部は回転ヘラ切りのち不定ナデ。体部下方ロクロヘラケズリ後不定ナデ　他はロクロナデ　内面ーロクロナデ	暗灰青色	硬	普通～良	直径2mm以下の砂粒をやや含む。	口縁部100 底部100 (肩部ー部欠損)	頸部に一条の沈線がみられる。口縁部上方内面と体部上面に自然釉付着
土師器	32	甕	口縁部～体部	8.9	9.4	外面ー口縁部ヨコナデ、体部タテハケ　内面ー口縁部～体部ヨコハケ、ユビオサエ	淡橙色	軟	やや粗	3mm以下の砂粒をやや含む。	10	
	33	甕	口縁部～体部	10.8	4.7	外面ー口縁部横方向ナデ、体部はタテハケ　内面ー摩滅により不明	淡橙乳色	軟	やや粗	直径5mm以下の砂粒を含む。	20	外面体部のハケメは粗いものと細かいものの二種類がある。
	34	甕	口縁部～体部	13.0	3.8	外面ー口縁部ヨコナデ　体部タテハケ　内面ーヨコハケ	淡橙色	軟	良	直径1mm以下の砂粒を少量含む。	10	
	35	甕	口縁部	13.0	2.1	外面ー口縁部横方向ナデか　頸部タタキか　内面ー口縁部横方向ナデ　頸部は縦方向ナデ	淡乳桃色	軟	良	直径2mm以下砂粒を僅かに含む	10	
	36	羽釜または甕	口縁部	15.0	3.2	外面ー口縁部横方向強いナデ（条線あり）　頸部はタテハケ　内面ーヨコハケ	黒褐色(外面・ススによる)茶褐色(内面)	やや硬	普通	直径3mm以下の砂粒をやや含む。	10	外面全体に煤付着。生駒西麓産系の胎土
	37	小型甕	口縁部～体部下半	9.0	9.5	外面ー口縁部横方向ナデ　体部タテハケ後ナナメハケ　内面ーヨコハケ、横方向ナデ　ユビオサエ	明褐色	やや軟	やや粗	直径3mm以下の砂粒を僅かに含む。	30	
	38	小型鉢	口縁～底部	12.0	6.4	外面ー体部の肩部～腹部はタタキ　底部ーヨコハケ・ヘラケズリ　外面底部ーヘラケズリ・ハケメ　口縁部外内面ー横方向ナデ　口縁部内面ーー部にタタキ	淡橙色	軟	良	直径3mm以下の砂粒を少量含む。	40	全体に摩滅著しい。
	39	杯C	口縁～底部	14.5	4.5	外面ー底部～体部ヘラケズリ、体部の一部にヘラミガキ　口縁部内外面ー横方向ナデ　内面ーナデ、底部～体部は一段放射状暗文	赤褐色	やや軟	良	直径3mm以下の砂粒を僅かに含む	85	全体に摩滅が著しい。
	40	ミニチュア把手付鍋	口縁部～底部	9.3	6.0	外面ー体部タテハケ　口縁部横方向ナデ　底部は不定方向ナデか　内面ー口縁部横方向ナデ　体部ユビオサエ・不定方向ナデ	茶褐色	軟	粗	直径4mm以下の砂粒を多く含む	70	体部外面に黒斑ないしはススス付着。生駒西麓産系の胎土
	41	ミニチュア竈	口縁～支脚部	口径8.3 支脚部7.3	8.1	内外面ー不定方向ナデ、ユビオサエ	橙色	軟	粗	直径3mm以下の砂粒を多く含む	20	口縁部から体部上部にかけて黒斑ないしはスス付着。肩部に把手が剥離した痕跡あり 生駒西麓系の胎土か
韓式系土器	42	平底鉢	口縁～底部	14.2	9.6	外面ー頸部　タタキより前の板状工具による調整痕。 体部　平行タタキ、ただし底部付近はタタキ後ナデ。 底部はナデ。 内面ー口縁部ナデ。体部当具痕	明黄褐色	やや硬	粗	直径3mm以下の砂粒を多く含む。	25	体部外面に黒斑

郡川16号墳　出土遺物観察表

〈耳環〉(第15図)

当時の報告では、玄室内の壁面に接して出土したと報告されているものである。表面は全体に暗灰黒色を呈し、部分的に薄く金色を呈する部分がある。また一部に緑青が付着している。縦方向の径2.7cm、横方向の径３cm、断面径0.55～0.7cmを計る。重さは15.8ｇである。保存処理時の蛍光Ｘ線分析結果に基づく伊藤幸司氏の所見（伊藤幸司2009）では、「銀（Ag）が多量に検出されてはいるが、比較的多量の金（Au）と少量ではあるが水銀（Hg）も確認しており、現状では損傷（変質）が激しいため外観からは確認できないが、金色を呈していた可能性が高い」とされている。また、「つくりとしては、①造形した銀素地の上に鍍金が施されていた。②金と銀の合金を用いて造形した、という二つが考えられる。水銀が確認できていることから①の可能性が高い。しかし②についても銀の量比が高い場合、その影響から表面が銀～黒紫色に変色する可能性があるので、その可能性を否定することはできない。」とされている。



第15図　郡川16号墳出土耳環実測図（１／２）

先に引用した渡辺智恵美氏（渡辺智恵美1997）の分類を参考にしたうえで、伊藤氏の指摘される①銀素地の上に鍍金が施されていた可能性を考えると、本例は、銅芯銀張鍍金製であった可能性が考えられる。また、重さからみて本例が中実であったことは確実とみられる。そして、伊藤氏が二つ目の可能性として挙げられている②金と銀の合金を用いて造形したを考えるならば、銅芯合金（金・銀）板張り製の可能性も残されている。しかしながら、肉眼観察においても、表面の全体が暗灰黒色を呈するのではなく、部分的に薄い金色部分がみられることは、鍍金の痕跡の可能性がある。このような点から、ここでは本例が中実の銅芯銀張鍍金製であった可能性が高いと考えておきたい。

〈不明鉄器（鉄釘状鉄製品）〉(第16図)

残存長30.9cmを計る棒状の鉄製品である。基部付近の残存最大幅2.4cm、先端付近の残存最大幅は、0.9cmを計る。断面形は先端付近と中央付近は方形、基部付近は長方形を呈する。基部付近が膨らみをもち、直線的に延びて先端部分がやや屈曲して欠損する。

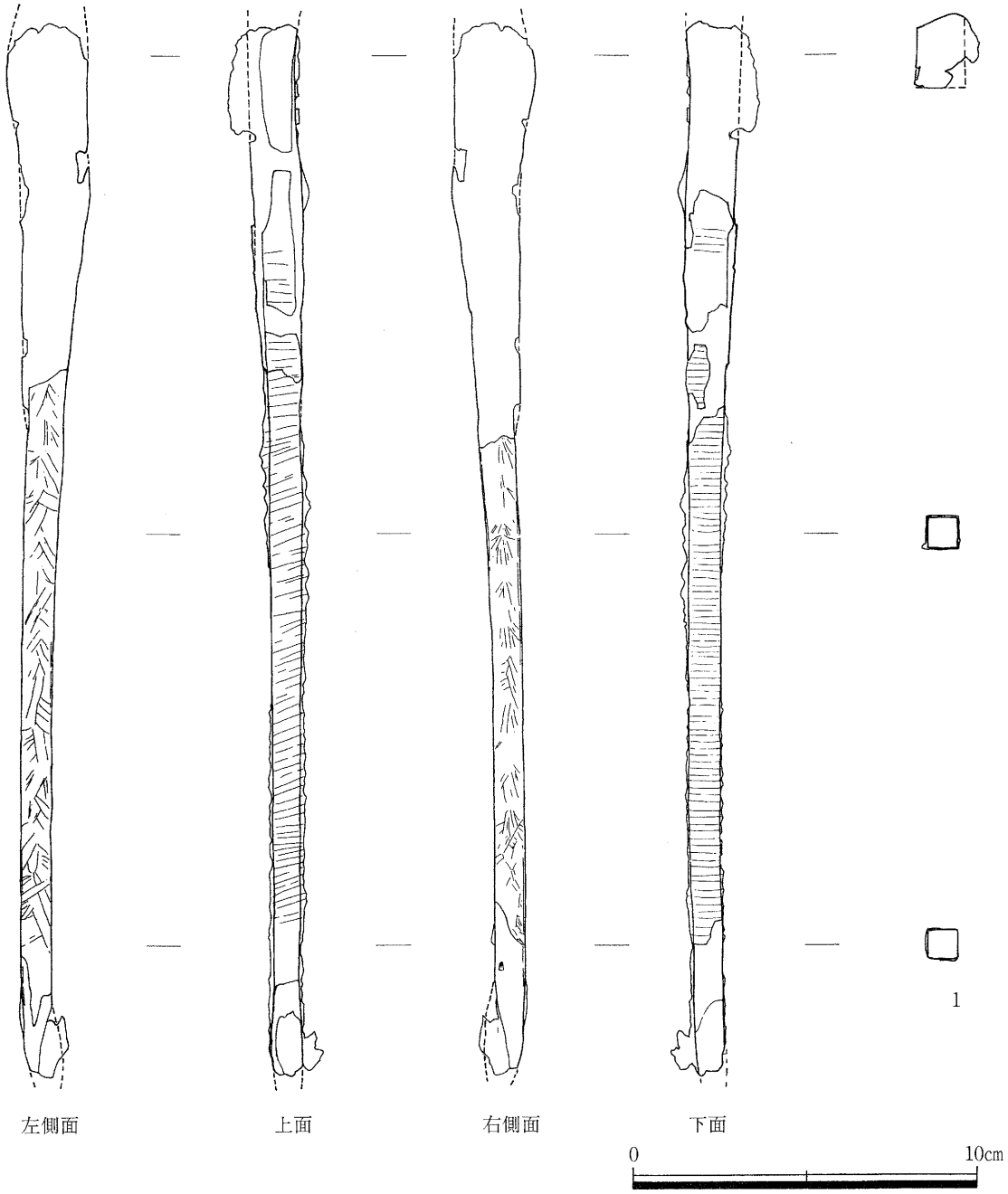
側面には木質かとみられる幅２ミリ程度の繊維状のものが、上面と下面とした対面する両側面では長軸に対して直交方向にみられ、残りの二面では斜め方向に互いに重なったように見えている。このことから、繊維状のものが巻かれていた可能性も考えられる。しかし、この繊維状のものが木質の遺存した状態に似ており、木棺の板材を結合した鉄製棺釘であった可能性も考えられる。

鉄製棺釘である場合、繊維状のものが、長軸に対して直交方向に縞状に見える部分は理解できるが、残りの対面する両側面が、なぜ斜め方向に互いに重なったように見えるのかは判然としないが、法量や形状のありかたが、６世紀前半から中頃に造られた郡川16号墳の時期のものとしても違和感のないものであることから、鉄製棺釘の可能性を考えておきたい。(註１)

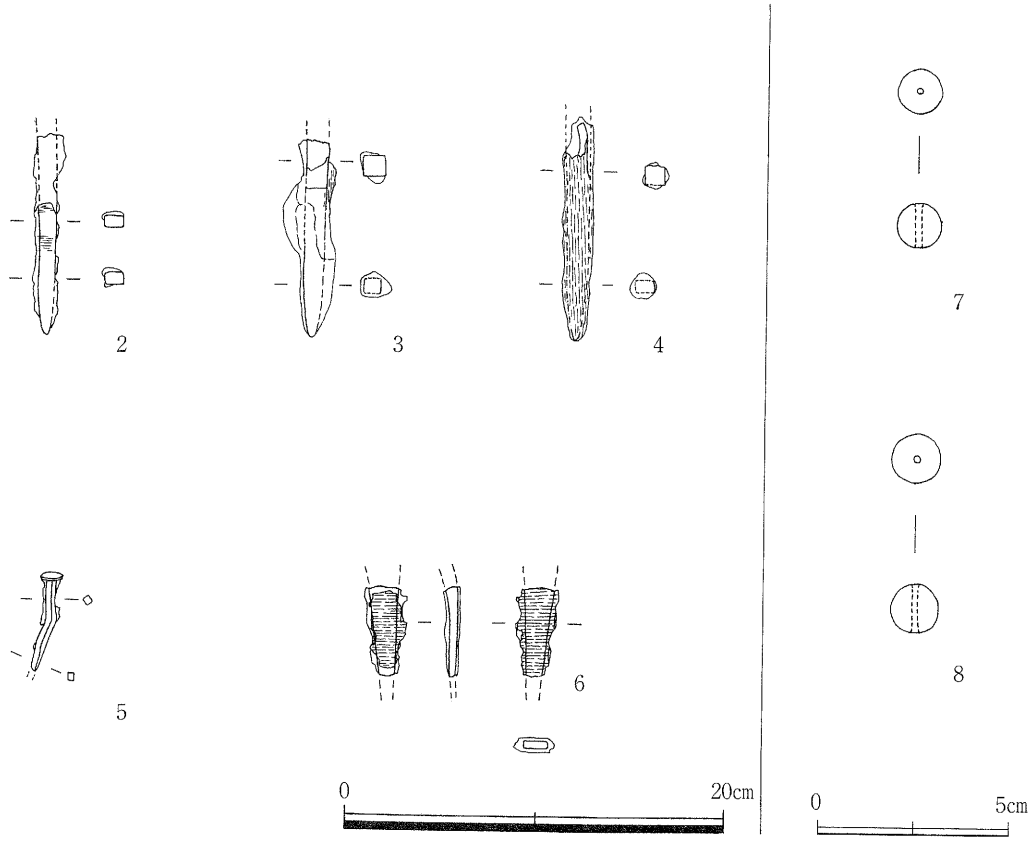
〈鉄製棺釘・鉄製鎹〉(第17図２～６)

実測できたものは、鉄釘４点（２～５）と鉄鎹１点（６）である。鉄釘は大形のもの（２～４）と小型のもの（５）がある。いずれも木棺に使用されていた際の木質が遺存している。２と５は鉄釘の軸方向に対して直交する方向の木目が、３と４は平行する方向の木目がみられる。このうち小型の５は、円盤状の頭部が遺存している。２～４については、頭部が残存しておらず、全体の形状は不明であるが、残存長から10cm以上の長さであったことは確実である。鉄製鎹は、部分破片であるが、最大幅1.5cm、最大厚0.6cmを計る薄板状を呈し、全面に木質が遺存し、軸方向に対して直交する木目がみられる。

木棺の板材を結合する棺釘については、先学の研究から棺材が薄くなり棺が軽量化される時期の６世紀後半頃から小型化することが指摘されている（田中彩太1978)。また瀬川貴文氏による釘結合式木棺に使用される鉄釘の分類（瀬川貴文2005）によると、小型の鉄釘（５）については、鋲頭型Ⅱ類に位置



第16図　不明鉄器実測図（1／2）



第17図　郡川16号墳鉄器・石製玉実測図（１／２）

番号	種類	部位	現存幅（cm）			現存長（cm）	身部断面（cm）		断面形	木質の状況	備考
			頭部径	最大幅	最小幅		長辺	短辺			
1	不明鉄器（鉄製棺釘か）	頭部～先端部付近	—	2.4	0.9	30.9	2.2～0.8	1.4～0.8	正方形～長方形	木質あるいは植物繊維を巻いた痕が遺存。上面・下面とした対向する二面は長軸に対し直交方向。左・右側面とした対向する二面は斜め方向。	保存処理済。
2	鉄製棺釘	身部～先端部	—	（身部）1.0	（先端部）0.3	10.7	1.1～1.0	0.6	長方形	身部の一部に残存・木目は釘長軸に対し直交方向。	
3	鉄製棺釘	身部～先端部	—	（身部）1.2	（先端部）0.3	10.5	1.2～0.9	1.1～0.8	正方形～長方形	身部の一部に残存・木目は釘長軸に対し平行方向。	
4	鉄製棺釘	身部～先端部	—	（身部）1.2	（先端部）0.3	11.9	1.2～1.0	1.0～0.7	正方形～長方形	全体に残存・木目は釘長軸に対し平行方向。	内部で数個に破片化している。
5	鉄製棺釘	頭部～先端部付近	1.2	（身部）0.5	（身部）0.3	5.3	0.4～0.5	0.4～0.3	正方形～長方形	身部の一部に残存・木目は釘長軸に対し直交方向。	残存部中央付近で屈曲する。小型の釘。保存処理済。
6	鉄製鎹	身部～先端部付近	—	（身部）1.5	（身部）0.8	4.7	1.6～0.8	0.6～0.3	長方形	身部の両面に残存・木目は身部長軸に対し直交方向。	

づけられており、鋲頭型については、ＴＫ43型式期に若干みられ、多くはＴＫ209型式期以降に使用されるとされている。このことから、本例の大型と小型の鉄釘には、時期差があり、先の副葬土器のグルーピングに対応させると、大型の釘（２～４）は、初葬時の副葬土器群としたＩ群、（ＭＴ15型式期）～ＴＫ10型式古段階期、あるいは第一回目の追葬としたⅡ－１群（ＴＫ10型式新段階（ＭＴ85型式期）の木棺に使用された可能性が考えられる。そして、小型の鋲頭型Ⅱ類に位置づけられる５は、第二回目の追葬時の副葬土器群としたⅡ－２群（ＴＫ43～ＴＫ209型式期）の埋葬棺に使用された可能性が考えられる。

また先述した不明鉄器が鉄釘であるとすれば、残存長30.9㎝を計る大型の鉄釘であり、２～４と同様に、初葬時ないしは一回目の追葬時の木棺に使用されたものと考えられる。

(郡川16号墳における木棺の位置づけ)

郡川16号墳については、昭和41年度の大阪府教育委員会の調査報告に石棺材は認められず、木棺あるいは他の埋葬方法が行われたものと推定されている。郡川16号墳からは多くの遺物が出土しているにも関わらず、石棺材が確認されていないことから、郡川16号墳の埋葬棺は木棺のみであった可能性が高い。このことから、郡川16号墳出土の大型の鉄釘は初葬時か第一回目の追葬に伴うものかは判断できないが、初葬時から木棺が使用されていた可能性が高いとみられる。

鉄釘を使用する釘結合式木棺の使用分布を検討された瀬川氏は、１期とされたＴＫ23～ＴＫ10型式期までの時期の釘結合式木棺を使用する古墳には、木棺直葬墳として奈良県高取町坂ノ山４号墳や初期横穴式石室である大阪府羽曳野市藤の森古墳、同柏原市高井田古墳、奈良県桜井市桜井公園２号墳があり、畿内の特定地域に集中し、渡来系氏族や彼らと関係の深い集団によって使用された場合が多かったと指摘されている。郡川16号墳についても、石室の形式やミニチュア炊飯具セット・韓式系平底鉢の副葬土器のありかたから、渡来系集団の主体的な関わりが推定される古墳である。

高安古墳群集中地域（高安千塚）では、確認された225基の古墳のうち、凝灰岩製組合式石棺が41基、刳り貫き式石棺が１基、木棺のみが３基、陶棺が１基、羽釜転用棺が１基、それぞれ確認されている。このうち凝灰岩製組合式石棺が確認された41基のうち３基は木棺も使用されたことがわかっている。木棺のみ確認された３基は郡川16号墳と郡川３－Ｂ号墳、服部川132号墳であり、郡川３－Ｂ号墳は郡川３号墳に付随して造られた７世紀前半の小型の無袖式石室である。また、服部川132号墳は石室が半壊状態であったため、本来は石棺も埋納されていたかは判然ししない。

高安古墳群集中地域は、６世紀後半を中心に造墓される古墳群であり、埋葬棺は、凝灰岩製組合式石棺が主体となるとみられるが、初現期の古墳である郡川16号墳が木棺のみを埋葬棺とし、渡来系要素をもつ石室や土器を有する点は注意される。高安古墳群集中地域からは外れるが、高安古墳群周辺地域黒谷10号墳は、方形に近い平面プランをもつ初期横穴式石室墳であり、ＴＫ10型式古段階の須恵器が初葬時の副葬土器とみられるが、鉄釘の出土位置から、玄室内に木棺が２棺、長軸に平行して埋葬されていたものと推定されている。石棺材は出土していない。土師器の把手付コップ形土器が出土している。

発掘調査例が少ないため、現段階では資料不足ではあるが、高安古墳群集中地域とその周辺での初現期の横穴式石室墳に、釘結合式木棺のみの使用が認められることは、古墳群の造墓開始期における渡来系集団との関わり考えていくうえで、重要な要素になるものと考えられる。

〈石製玉〉(第17図７・８)

石室内の出土位置は不明である。２点とも石英質の丸玉で、半透明の乳白色を呈する。７は直径1.2cm、８は直径1.3cm、孔径は0.2cmで直線的に穿孔されている。７の表面には一部に表面の汚れか、薄紫色を呈している部分がある。力量不足のため判然としないが、古墳時代や古代の玉類には、類例が確認できない。このことから、ここでは後世のものが混入した可能性を考えておきたい。

(註１) 御所市教育委員会木許守氏にご教示をいただいた。

(引用文献)

安村俊史 2008『群集墳と終末期古墳の研究』清文堂

高萩千秋 2008「高安古墳群黒谷10号墳の調査」『平成19年度高安古墳群分布・測量調査報告書』八尾市教育委員会

原田修 1987「高安郡川16号墳」『韓式系土器研究』Ⅰ　韓式系土器研究会

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』平安学園考古クラブ

中西克宏 1999「曲げ庇系竈を副葬する古墳」『光陰如矢－荻田昭次先生古稀記念論集』「光陰如矢」刊行会

伊藤幸司 2009「金属製品の保存処理について」「平成 19 年度保存処理事業報告」『八尾市内遺跡平成 20 年度発掘調査報告書』八尾市教育委員会

渡辺智恵美 1997「耳環小考－製作技法、材質からみた分類－」『元興寺文化財研究所創立三十周年記念誌』元興寺文化財研究所

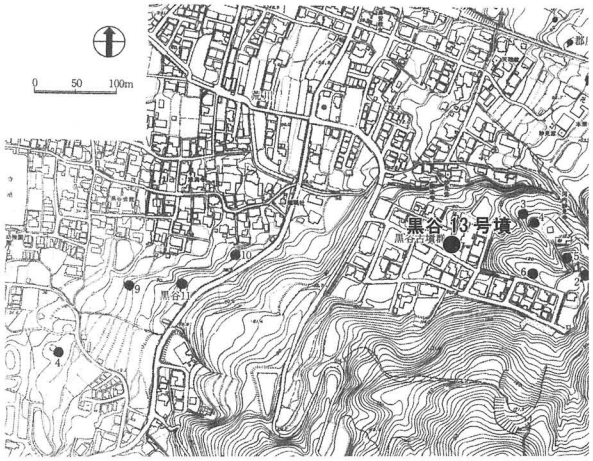
田中彩太 1978「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第25巻第２号

瀬川貴文 2005「釘結合式木棺の受容と展開」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退官記念』

(4) 黒谷13号墳（丸山塚・教興寺寄贈土器出土古墳）

[調査時の状況]

本遺物は、教興寺と記されたコンテナ１箱に、須恵器の子持ち器台・坏身・坏蓋・装飾付椀・高坏・壺・壺蓋・瓶が入れられていたものである。この土器については、昭和41年の大阪府教育委員会による調査時に、八尾市の教興寺七丁目に所在する寺院である教興寺から寄贈されたものであるとのことであり、どこの古墳から出土したものであるかは不明であるとのことであった（註１）。このため出土古墳の特定ができないでいたところ、川瀬貴子氏の論文（川瀬貴子2007）において、本遺物の子持ち器台の坏蓋と類似する坏蓋を紹介され、出土地点は黒谷五丁目・六丁目周辺で、出土時期は1960年代前半とされていた。さらにこのことについて、高安古墳群の学史研究をされている松江信一氏からこれは黒谷六丁目に所在し、昭和37年に消滅した丸山塚からの出土ではないかとのご教示をいただいた。このため、八尾市史編集委員であり、昭和35～38年に高安古墳群の分布調査を行われた沢井浩三氏の古文化財台帳（古墳）を確認したところ、沢井氏の台帳に174号墳（丸山塚）として写真とともに記述があった。台帳は昭和38年２月17日の日付があり、遺跡の状況として、昭和37（1962）年８月に採土工事のため全壊し、その際に石棺の底石３枚の下から子持ち器台が出土したとあり、所有者の欄には、「教興寺」と記されていた。このため川瀬氏にお願いして、資料提示者の方に再度ご確認いただいたところ、採集された土地は教興寺の所有地であったことが判明した。これらのことから、本遺物については、174号墳（丸山塚古墳）出土品と確定して差し支えないものと判断できる。本墳については、現在、八尾市教育委員会において、黒谷13号墳の古墳番号を付している。また、古墳の位置については、松江氏により、黒谷五丁目地内の現在は住宅地の位置に推定されている（松江信一1998）。



第18図　黒谷13号墳位置図
（花田勝広 2008「高安千塚の基礎的研究」掲載図を改変・加筆）

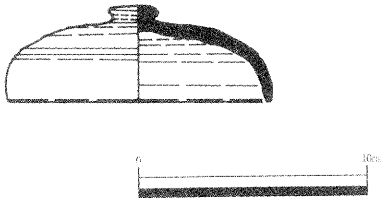
昭和38年当時の黒谷13号墳写真
（沢井浩三氏古文化財台帳から転載）

[立地と石室の状況]

松江信一氏による黒谷13号墳の推定位置と沢井浩三氏の台帳をもとに、古墳の立地と石室の状況についてみてみたい。黒谷13号墳の位置は、高安古墳群の周辺地区黒谷地区に位置し、北側には、集中地域の郡川南支群がある。黒谷地区は郡川地区と荒川の谷によって分かたれており、黒谷地区の古墳は、大字黒谷・教興寺の山塊から北西方向に延びる尾根上に一定のまとまりをもって分布する。高安古墳群集中地域のように、密に集中した分布ではなく、尾根上に数基ずつ分布し、黒谷17号墳のように、標高192mのかなり高い尾根上まで分布している。黒谷13号墳は、標高90m前後の北西方向に延びる尾根上に存在したとみられる。本墳と同一尾根上の東側上方には、黒谷６号墳がある。また一つ北側の尾根には、黒谷１～５号墳が連続して立地している。

石室について沢井氏の台帳には、「僅かに奥壁を含む天井石一枚部分だけあった」とされている。また、開口方向については西南と記され、種別には円墳とある。台帳の写真を見ると、墳丘盛土はほとんど流出し石室石材が露出している。石室は奥壁と天井石一枚分が遺存している状態であり、石室内は流入土が堆積している。玄室の幅は天井石の大きさからみて、1.5m～２m位であろうかとみられる。石室は

消滅する以前から半壊状態であったことから、石室の形式・規模を知ることはできないが、写真にある石材の積み方からみても古式の石室ではなく、概ね６世紀後半頃の石室であったかとみられる。また、工事時に石室内から石棺の底石が３枚出土したとの記述から、組合式石棺が納められていたものとみられる。

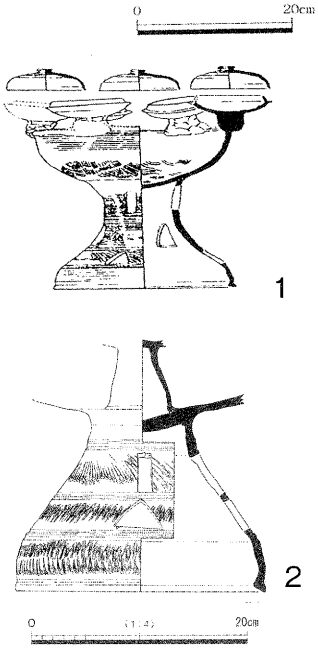


第19図　採集された子持ち器台坏蓋
（川瀬貴子 2007 論文より転載）

［出土遺物］（第21図）

教興寺より寄贈された土器はすべて須恵器であり、接合できない破片は少なく、12個体を実測することができた。須恵器は、概ねTK10型式新段階・TK43型式期、TK209型式期に位置づけられるものとみられる。ＴＫ10型式新段階頃に位置づけられるものは、坏蓋（２）、短脚高坏あるいは台付長頸壺の脚部（８）、壺（９）である。ＴＫ43型式期頃に位置づけられるものは、坏身（３・４）があり、壺（10）、壺の蓋（11）もこの時期頃かとみられる。ＴＫ209型式期に位置づけられるものは、坏蓋（５）、瓿（12）がある。

ここでは、特徴的な遺物である子持ち器台（１）と装飾椀（６・７）について、やや詳しくみてみたい。

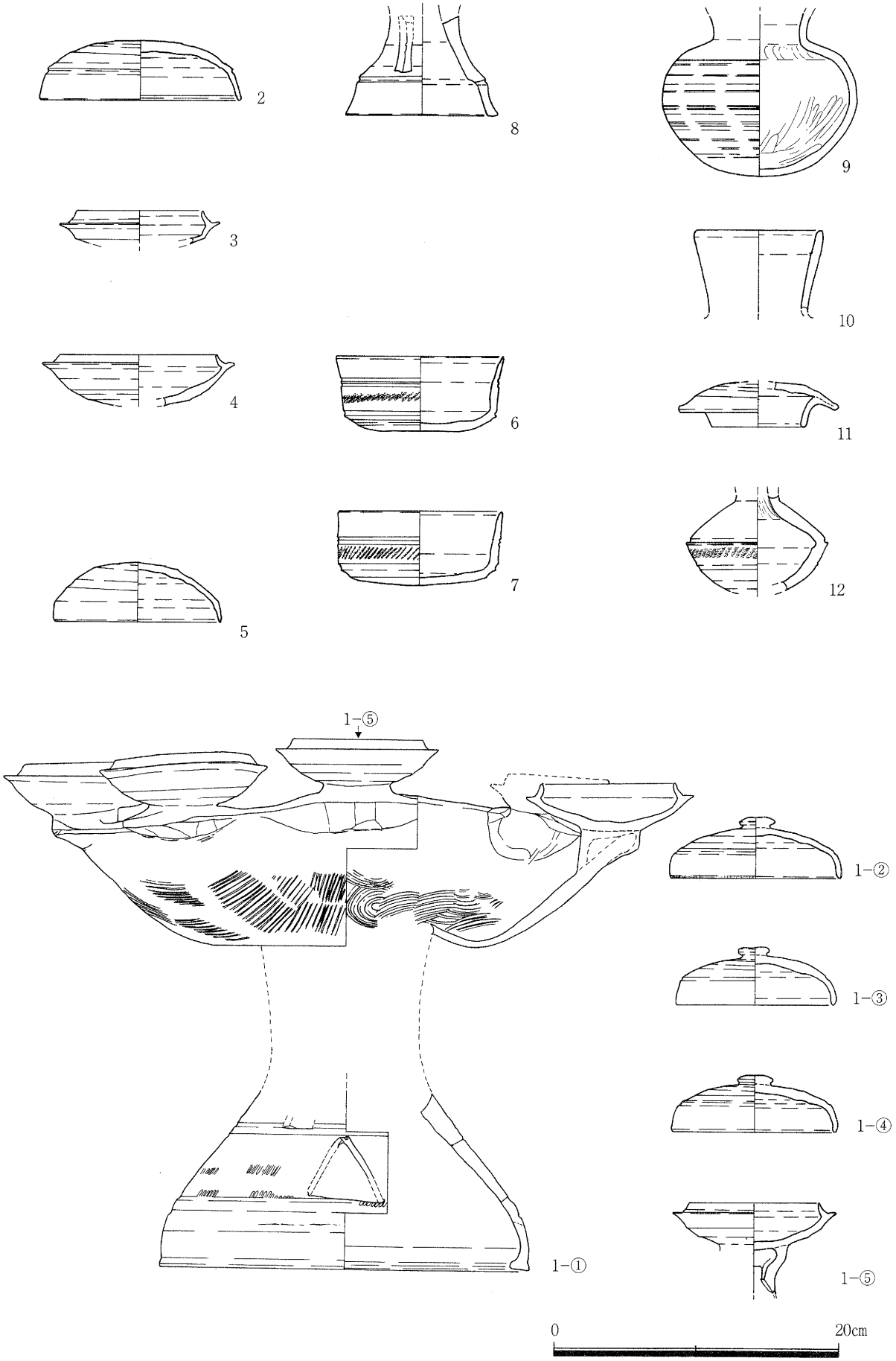


第20図　一須賀古墳群ＷＡ６号墳（１）と高安古墳群楽音寺８号墳（２）の子持ち器台

（子持ち器台（１）） この子持ち器台の部品には、鉢部・脚部（１－１）と子持ち部の坏蓋３点（１－②・１－③・１－④）がある。前述した川瀬氏報告の坏蓋を含めると、４点の坏蓋が遺存していることになる。鉢部には坏身が４つ取り付いた状態で遺存しているが、鉢部口縁には坏部の剥離痕が４ヶ所みられることから、本来は合計８個の坏が取り付けられていたものである。また鉢部の中央は中心部に向かって膨らみを持っているが、中心部が17cm×13cmの範囲で欠損しており、ここにも本来は高坏等の器種が取り付いていたものと推定される。脚部は、二段のスカシが遺存しており、下段は三角形三方スカシ、上段は長方形三方スカシであったと推定される。脚部の下端は丸く内湾し、端部は内側に肥厚する。これに類似する子持ち器台の脚部は、高安古墳群周辺地域楽音寺地区の楽音寺８号墳において出土しており（樋口薫 2007）、スカシの配置も概ね一致する（図20図２）。この楽音寺８号墳の子持ち器台を参考に、本遺物の全形を推定復元し図化した。推定される全高は36cm前後となる。また、鉢部の口径は38.5cm、子持ち部の坏を含めた最大径は49cm、底径は26cmとなる。また、色調は全体に暗青灰色を呈するが、自然釉が定着して黒褐色を呈する部分と素地の暗青灰色の部分とが明瞭に分かれており、子持ち部の坏蓋も同様に色調が分かれている。このことから、本遺物は、子持ち部の坏身に坏蓋をかぶせてセットした状態で、窯に入れられ焼成されたものとみられる。また、この遺物の特徴として、子持ち部の坏蓋の口縁端部にキザミメを有するもの（１－②）があること、子持ち部の坏蓋・坏身のすべての中央部に静止ナデの調整がみられることが挙げられるが、これについては、郡川16号墳出土須恵器を含めて、考察２で検討したい。

さて、この子持ち器台の須恵器型式の位置づけであるが、子持ち部の坏のありかたと周辺古墳での子持ち器台の出土例等の両面から検討してみたい。まず、子持ち部の坏身はやや短く内傾したたちあがりをもつものであり、ＴＫ43型式期の坏身に類似する。坏蓋はつまみをもつもので、天井部と口縁部の間にはややあまい稜線をもち、口縁部はゆるやかに内湾する。また脚部も内湾して肥厚する。ＴＫ10型式新段階からＴＫ43型式期頃かとみられる。

子持ち器台の周辺古墳での出土例としては、楽音寺８号墳出土例がある。楽音寺８号墳出土例は先述したように脚部のありかたが、本例と類似するものである。出土須恵器は石室破壊後に周濠内に投棄さ



第21図　黒谷13号墳遺物実測図（1 ／ 4）

番号	器種	部位	径（cm）	現高（cm）	調整	色調	焼成	胎土		残存率（%）（径計測部分）	備考
1－①	子持ち器台	鉢部	（口径）38.5	14.7	外面－平行タタキ　内面－上半部はタタキ後ナデ。下半部は同心円文状当て具痕	暗青灰色	硬	良	直径2㎜以下の砂粒を僅かに含む	20	外面に自然釉付着 杯部は8つ付く。中央には高坏等が付属していたとみられる。焼成による色調の具合から坏部に蓋を乗せた状態で焼成したとみられる。
		脚部	（底径）26.2	12.6	外面－平行タタキのちロクロナデ　内面－ロクロナデ	暗青灰色	硬	良	直径2㎜以下の砂粒を僅かに含む	10	外面に自然釉付着。一段目三角形3方透かし、2段目が長方形3方透かし
1－②		子持ち部　杯蓋	12	4.4	外面－天井部はロクロヘラケズリのちロクロナデ 内面－ロクロナデ　天井部中央は静止ナデ	暗青灰色	やや軟	良	直径2㎜以下の砂粒を僅かに含む	90	外面の口縁端部にキザミメ施す
1－③		子持ち部　杯蓋	11.4	4.1	外面－天井部はロクロヘラケズリのちロクロナデ 内面－ロクロナデ、天井部中央は静止ナデ	灰褐色	硬	良	直径2㎜以下の砂粒を僅かに含む	100	外面に自然釉付着
1－④		子持ち部　杯蓋	11.5	4.1	外面－天井部はロクロヘラケズリのちロクロナデ 内面－ロクロナデ　天井部中央は静止ナデ	暗青灰色	硬	良	直径2㎜以下の砂粒を僅かに含む	100	外面に自然釉付着
1－⑤		子持部坏身	9.2	（坏部）3.0	外面－体部ロクロヘラケズリ、他はロクロナデ　接合部はユビオサエ　内面－ロクロナデ　底部中央は静止ナデ	暗青灰色	硬	良	直径2㎜以下の砂粒を僅かに含む	65	外面に自然釉付着
2	杯蓋	口縁部～天井部	14	4.2	外面－天井部の3/4ロクロヘラケズリ　他はロクロナテデ　内面－ロクロナデ 天井部中央に静止ナデ	灰色	軟	粗	直径5㎜以下の砂粒を含む。	8	外面一部に自然釉付着。胎土に炭をぼかしたような粒子を含む。
3	杯身	口縁部～体部上半	9.0	2.3	外面－底部上半ロクロヘラケズリ　内面－ロクロナデ	暗青灰色（体部～底部黒灰色）	硬	普通	直径5㎜以下の砂粒を少量含む。	25	外面受部上面に自然釉付着
4	杯身	口縁部～底部	11.1	3.6	外面－底部の4/5はロクロヘラケズリ　他はロクロナデ　内面－ロクロナデ	青灰色	硬	やや粗	.直径5㎜以下の砂粒を少量含む。	20	底部外面にヘラ記号
5	杯蓋	口縁部～天井部	11.8	4.2	外面－天井部の4/5ロクロヘラケズリ　他はロクロナデ　内面－ロクロナデ　天井部中央は静止ナデ	灰色	軟	良	直径2㎜以下の砂粒を少量含む。	45	
6	装飾椀	口縁部～底部	11.8	5.3	外面－口縁～体部はロクロナデのち口縁一部は上下方向ナデ、底部はロクロヘラケズリのちロクロナデ　内面－ロクロナデ	暗灰色	硬	良	直径3㎜以下の砂粒を少量含む。	60	ロクロナデ・ロクロヘラケズリを含め全体に丁寧な調整が施される。底部外面にヘラ記号
7	装飾椀	口縁部～底部	11.6	5.3	外面－口縁～体部はロクロナデのち口縁一部は上下方向ナデ、底部はロクロヘラケズリのちロクロナデ　内面－ロクロナデ	青灰色	硬	普通	直径5㎜以下の砂粒をやや含む。	75	ロクロナデ・ロクロヘラケズリを含め全体に丁寧な調整が施される。底部外面にヘラ記号
8	短脚高杯あるいは台付壺	脚部	10.8	7.1	外面－ロクロナデ　内面－ロクロナデ	暗青灰色	硬	やや粗	直径4㎜以下の砂粒をやや含む。	60	長方形三方スカシとみられる。
9	壺	頸部～底部	体部最大径13.9	11.6	外面－口縁～肩部はロクロナデ　体部カキメ　底部はヘラケズリ後ナデ　内面－頸部上半はロクロナデ、下半はユビオサエ、体部～底部は放射状ナデ	灰褐色	硬		直径6㎜以下の砂粒を含む。	100	
10	壺	口縁部～頸部	8.8	5.8	外面－ロクロナデ　内面－ロクロナデ	暗青灰色	硬	普通	2㎜以下の砂粒をやや含む。	80	外面に自然釉付着
11	壺の蓋	口縁部～天井部	6.5	3.2	外面－天井部外縁～口縁部はロクロナデ　外縁はロクロナデのち不定方向ナデ 天井部上面はロクロヘラケズリ　内面－ロクロナデ	灰色	硬	粗	直径3㎜以下の砂粒をやや含む	65	
12	瓶	頸部～底部	体部最大径10.0	6.8	外面－肩部はロクロナデ 体部列点文、底部－ロクロヘラケズリ　内面－頸部シボリメ他はロクロナデ	暗青灰色	硬	粗	直径3㎜以下の砂粒をやや含む	45	注口部は欠失

黒谷13号墳遺物観察表

れたものであるが、ＴＫ43型式期・ＴＫ209型式期・ＴＫ217型式期のものが出土しており、先の個体についての検討を踏まえれば、ＴＫ43型式の須恵器群に含まれる可能性が高い。

また、この子持ち器台の位置づけについては、川瀬氏が一須賀古墳群の子持ち器台を集成して検討されており、一須賀古墳群ＷＡ６号墳が本例の子持ち部坏蓋の法量と最も近いが、天井部と口縁部の稜線が本例の方が明確であるため、本例の方がＷＡ６号墳よりやや古いと考えられている。確かに子持ち部坏蓋については本例の方が古い要素をもつ。しかし、脚部は、ＷＡ６号墳の方が脚端が内側に肥厚するとともに外側にもやや張り出す点等、本例よりもしっかりした印象がある。ＷＡ６号墳出土例については、ＴＫ43型式頃に位置づけられるかとみられる。このことや楽音寺８号墳出土例のあり方を勘案し、本例については、ＴＫ10型式新段階からＴＫ43型式期頃のものと考えておきたい。

(装飾椀（６・７))

特殊な形状の椀で、体部中位と体部から底部にかけての二箇所に沈線が施され、沈線の間には、列点文が施される。底部には幅の狭い丁寧なロクロヘラケズリがなされ、他は丁寧なロクロナデがなされる。焼成は硬質で、色調は６が暗灰色、７が青灰色を呈し、胎土は６は砂粒が少なく良であり、７はやや砂粒を含み普通程度である。法量は６が口径11.8cm、高さ5.3cm、７が口径11.6cm、高さ5.3cmを計る。両者は法量・調整・装飾方法が極めて近似する。

本例は、半島や大陸から伝来した金属器（銅鋺）を模倣した金属器模倣の須恵器の一つとされるもので（菱田哲郎2007)、本例のような椀については、つまみとかえりのついた蓋とセットで出土する事例も多く、近畿地方から中国地方に出土例がある（宇垣匡雅 1995)。河内の群集墳では、平尾山古墳群平野・大県第20支群３号墳、一須賀古墳群Ｑ９号墳に類例がある。この装飾椀の時期と出土意義については考察３に詳述している。ＴＫ43型式期からＴＫ209型式期に位置づけられるものと考えられる。

[まとめ]

今回の出土遺物の検討から、黒谷13号墳はＴＫ10型式期新段階の６世紀第３四半期頃、ＴＫ43型式期の６世紀第４四半期頃、ＴＫ209型式期の６世紀末から７世紀初め頃の少なくとも三回の埋葬が行われたものとみられる。そして石室のありかたからみても、ＴＫ10型式期新段階の６世紀第３四半期頃に築造された古墳であり、これらが初葬時の副葬土器であった可能性が高い。６世紀第４四半期頃と６世紀末から７世紀初め頃の須恵器群は、それぞれ第一回目の追葬、第二回目の追葬に伴う副葬土器の可能性が高い。子持ち器台１については、現段階ではＴＫ10型式新段階からＴＫ43型式期の時期幅で考えているため、初葬時か第一回目の追葬時のものかは判断できない。先述した沢井氏の台帳には、子持ち器台は石棺の底石３枚の下から出土したとあり、この石棺に伴う可能性が高いものとみられるが、初葬時か第一回目の追葬時のいずれかは判断できない。

須恵器装飾椀については、ＴＫ43型式期からＴＫ209型式期に位置づけられることから、第一回目ないしは第二回目の追葬時の副葬土器と判断されよう。これについては、平尾山古墳群の平野・大県第20支群３号墳においても、装飾椀と蓋のセットが追葬時の木棺に伴う副葬土器群（ＴＫ43型式期）に含まれると推定されている遺物であることから、同様の事例になる可能性がある。また、この装飾椀については、考察３で検討したように、有力な階層の古墳に副葬されることが多い。

装飾椀や子持ち器台を副葬須恵器とすることや組合式石棺を有する古墳であったことから、黒谷13号墳は６世紀第３四半期頃に造られた高安古墳群内でも、有力な階層の古墳であった可能性が考えられる。

註１　藤井直正氏、原田修氏のご教示による。

(引用文献)

川瀬貴子 2007「八尾市黒谷出土の子持器台蓋について」『大阪文化財研究』第 32 号（財）大阪府文化財センター

松江信一 1998年「高安古墳群分布図番号対照表」高安城を探る会

樋口薫 2007「花岡山古墳（2006-6）の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査』八尾市教育委員会

菱田哲郎 2007『古代日本　国家形成期の考古学』京都大学学術出版会

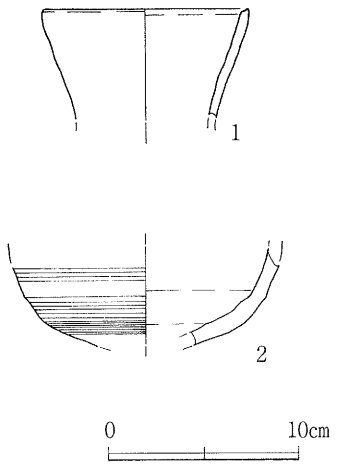
宇垣匡雅 1995「第６章　考察」『川戸古墳群』岡山県大原町教育委員会

（5）垣内・教興寺17号墳出土遺物（第22図）

移管した遺物の中で、177号墳（大阪府番号）出土とされていたものであるが、昭和41年度の調査では、本墳の清掃・実測は行われておらず、分布調査時の採集の可能性があるが、判然としない。177号墳（大阪府番号）は、八尾市の古墳番号で垣内・教興寺17号墳としている古墳で、高安古墳群周辺区域垣内・教興寺地区の標高160m前後の西に延びる尾根上に立地する。全長8.3mの右片袖式の横穴式石室で、玄室長3.5m、玄室幅1.9mの長方形プランの石室である。玄室の石積みは概ね４段積みで、袖石は三石で構成される。花田勝広氏の時期区分ではⅡ期、太田宏明氏の畿内型石室分類の４群に比定され、６世紀中頃の時期と考えられている石室である。

遺物は須恵器の長頸壺の口縁部（１）と壺の体部（２）である。

１はやや内湾気味に開く口縁部で、２は体部外面にカキメが施されている。小片のため須恵器型式を比定することは難しいが、本墳に伴う遺物として違和感のないものと考えられる。



第22図　垣内・教興寺17号墳出土遺物（１／４）

番号	器種	部位	径（cm）	現高（cm）	調整	色調	焼成	胎土		残存率（%）	備考
1	長頸壺	口縁部	10.8	5.8	内外面－ロクロナデ	青灰色	硬	良	直径3mm以下のレキを僅かに含む	17	内外面の一部に自然釉付着
2	壺	体部下半の一部	体部最大径14.0	5.0	外面－カキメ・底部はロクロナデ　内面－ロクロナデ	黒灰色（内面青灰色）	硬	良	直径3mm以下のレキを僅かに含む	13	外面に自然釉付着

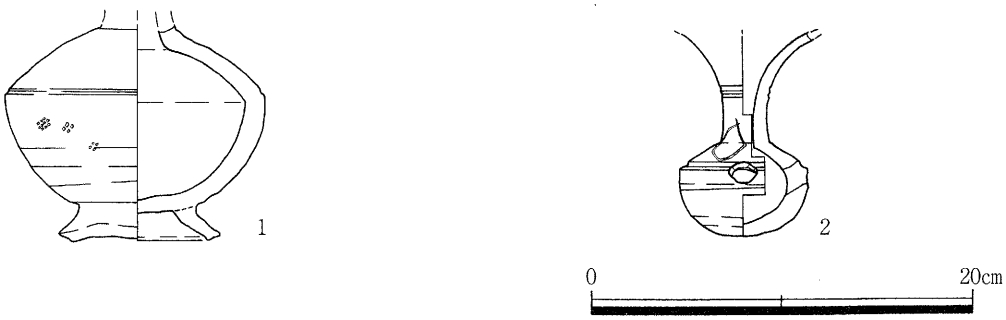
観　察　表

（6）出土古墳不明遺物

これらは、出土古墳名のマーキングがなく、出土古墳が不明である遺物である。当時の調査報告には郡川16号墳と服部川37号墳以外からは、ほとんど遺物が出土していなかったことから、いずれかの古墳の出土であると考えられる。

〈土器〉（第23図１．２）

２は、須恵器の瓹で残存高10.7cm、体部最大径6.8cmを計る。頸部から肩部にかけて、ヘラ記号が刻まれている。ＴＫ209型式期頃、６世紀末頃の時期のものとみられる。この瓹は器高が12cm前後と推定されるものであり、通常の瓹よりも一回り小さい。このような小型の瓹は、周辺では高安古墳群周辺地域神立地区の芝塚古墳（神立７号墳）や柏原市高井田横穴２－11号墳、同高井田遺跡谷―１東半、東大阪市山畑35号墳、一須賀古墳群Ｄ10号墳等で出土している。（註１）

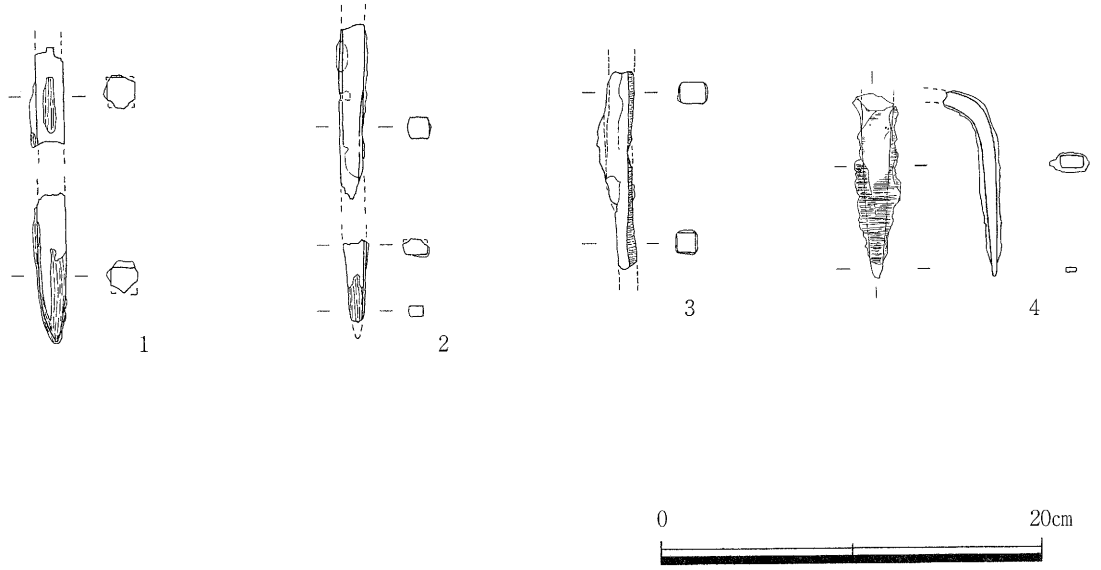


第23図　不明古墳出土土器実測図（１／４）

1は須恵器の台付長頸壺である。体部下半にタタキののちにナデ消しを行った痕跡がみられる。肩部には、自然釉が点状に付着している。一部に焼けひずみがみられる。ＴＫ217型式期、７世紀前半から中頃の時期のものとみられる

〈鉄器〉（第24図）

１～３は、木棺の板材を結合する鉄釘である。いずれも残存長10～15cm前後を計り、最大幅1.5cm前後を計るもので、断面形状は方形を呈する。表面にはいずれも木棺材の木質が遺存する。１．２には、釘身の長軸方向に対して平行する木質の木目がみられ、３には、釘身の長軸方向に対して直交する木質の木目がみられる。４は鉄製鎹である。先端部を含む長10cm分が遺存している。残存最大幅1.6cm、最大厚保1.2cmを計る。断面形状は長方形を呈する。表面には木棺材の木質が遺存し、身部の長軸方向に対して、直交する木質の木目がみられる。



第24図　不明古墳出土鉄器実測図（１／４）

番号	器種	部位	径（cm）	現高（cm）	調整	色調	焼成	胎土		残存率（%）	備考
1	台付長頸壺	体部～台部	脚台部7.2	11.5	外面－肩部はロクロナデ・体部下半上部はヘラケズリのちロクロナデ。体部下半は格子目タタキのちロクロヘラケズリ。脚台部はロクロナデ。内面－ロクロナデ	灰白色	硬	良	直径4mm以下のレキを僅かに含む	100（底部）	肩部に自然釉が点状に付着。焼けひずみと亀裂あり。
2	ミニチュア瓶	頸部～底部	体部最大径6.8	10.7	外面－頸部～肩部はロクロナデ・体部下半部はロクロヘラケズリ　内面－ロクロナデ　頸部内面に僅かにシボリメあり	暗青灰色	硬	良	直径3mm以下のレキを僅かに含む	100（体部）	外面の頸部から肩部にかけてヘラ記号あり。

不明古墳出土土器観察表

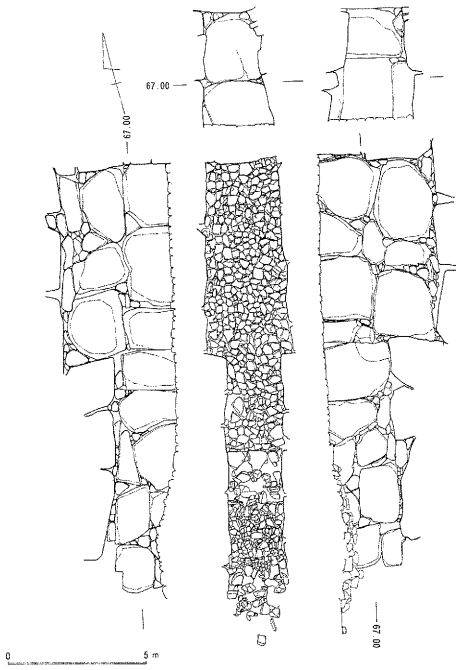
番号	種類	部位	現存幅（cm）			現存長（cm）	身部断面（cm）		断面形	木質の状況	備考
			頸部径	最大幅	最小幅		長辺	短辺			
1	鉄製棺釘	身部～先端部	—	1.6	0.3	5.2+7.8	1.7～1.5	0.9	正方形	身部と先端部の一部に残存・木目は釘長軸に対し平行方向。	2個体あり、接合しないが同一個体とみられる。
2	鉄製棺釘	身部～先端部付近	—	（身部）1.5	（身部）0.6	9.3+4.4	1.5～0.7	0.6～1.2	長方形	先端部付近に残存・木目は釘長軸に対し平行方向。	2個体あり、接合しないが同一個体とみられる。
3	鉄製棺釘	身部	—	1.4	0.9	10.5	0.8～1.3	1.0～1.1	長方形	身部の一部に残存・木目は身部長軸に対し直交方向。	
4	鉄製鎹	身部～先端部	—	（身部）1.6	（先端部）0.3	9.9	1.6～0.3	0.9～1.2	長方形	身部の両面に残存・木目は長軸に対し直交方向。	

不明古墳出土鉄器観察表

註１　柏原市での出土事例について、柏原市教育委員会安村俊史氏にご指示をいただいた。

（8）愛宕塚古墳出土遺物（第26図）

愛宕塚古墳は八尾市神立に所在する大阪府下最大の横穴式石室墳である。平成３年に大阪府史跡に指定されている。石室の全長15.7m、玄室は長さ７m、幅３m、高さ4.2m、羨道は長さ8.7m、幅2.15m、高さ2.2mを測る。高安古墳群の石室とは、隔絶した規模の石室を有する独立墳である。愛宕塚古墳からは、６世紀前半から６世紀末の須恵器が出土し、６世紀後半の須恵器が最も多い。石室は両袖式で、玄室は細長い長方形プランである。玄室と羨道は基本的に二段積みである。袖石は立石が直接、天井石を支えている。石室型式からみると７世紀に下る石室型式である。高安古墳群の６世紀後半の須恵器を伴う石室と比べても、明らかに新しい型式の石室であり、出土須恵器との時期差が疑問の残る古墳である。



第25図　愛宕塚古墳石室実測図
（八尾市立歴史民俗資料館1994より転載）

本墳からは、捩り環頭太刀の環頭部分や金銅張りの子持ち剣菱形杏葉等の豊富な副葬品が出土し、平成６年に八尾市立歴史民俗資料館から報告書が刊行されている（八尾市立歴史民俗資料館1994）。今回報告する遺物は、東大阪市郷土博物館に保管されたままになっており、報告されていなかった遺物である。

１は残存長23.6cm、最大幅1.6cm、厚さ0.2cmを計る薄板状の鉄製品である。残存部中央付近がやや屈曲している。全体に腐食が著しく、表層がかなり剥がれているように見える。表面には肉眼観察による限りでは、鋲孔や金銅張り等の痕跡は認められない。

２は残存長19.6cm、最大幅2.5cm、厚さ0.2cmの薄板状の鉄製品である。肉眼観察では判然としにくいが、上方は欠損し、下端は丸く弧を描いて端部となっているようにみられる。また、上方は長軸方向に屈曲する。さらに、全体に長軸に対して直交方向に中央に稜をなして屈曲している。全体に腐食が著しく、表層がかなり剥がれているように見える。表面には肉眼観察による限りでは、鋲孔や金銅張り等の痕跡は認められない

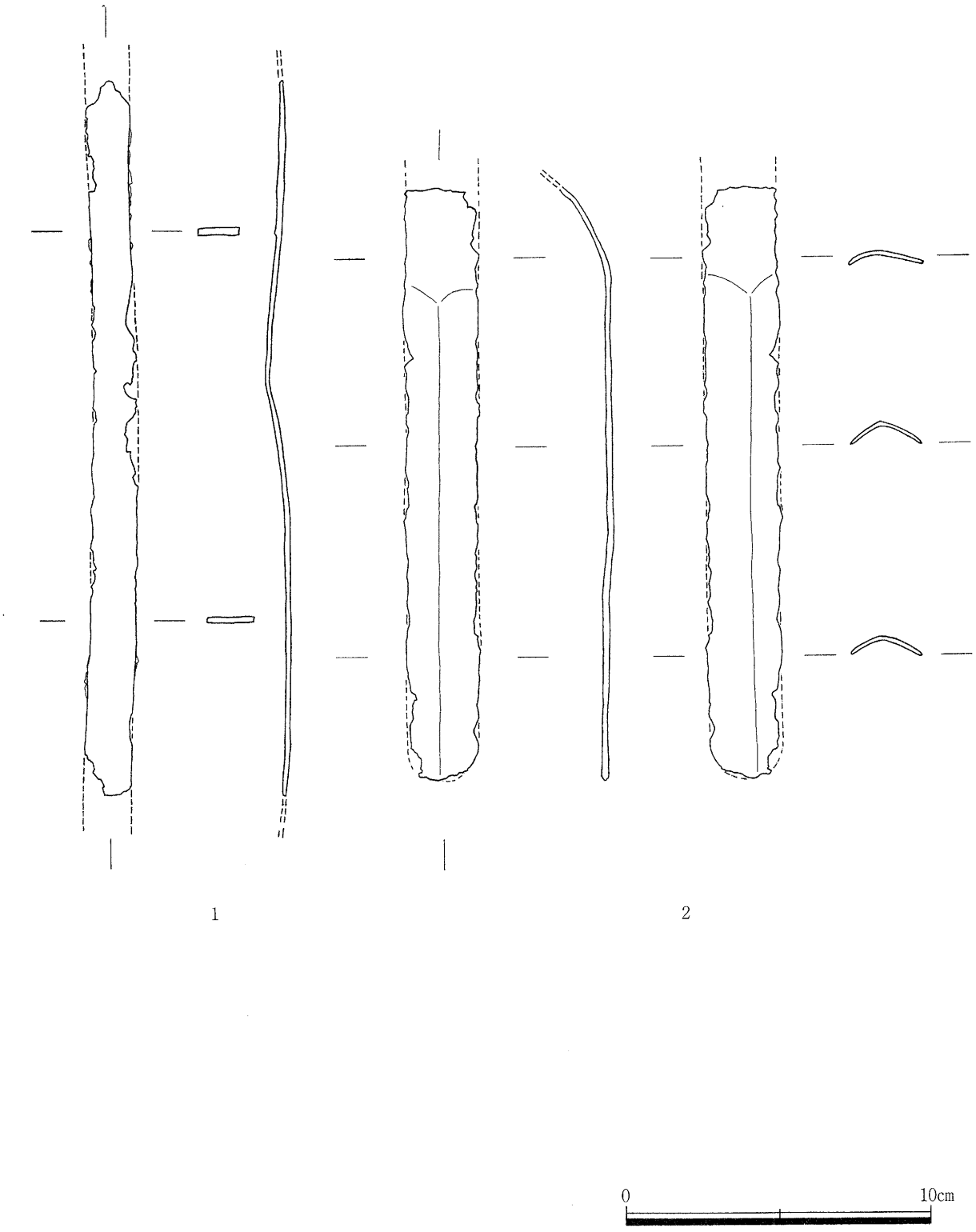
このような薄板状の鉄製品としては、馬具の部品が想定される。愛宕塚古墳からは、鉄地金銅張り製の馬具部品として、子持ち剣菱形杏葉、ｆ字形鏡板、辻金具、雲珠、帯金具、釣金具等が出土している。また、鉄製環状鏡板付二連式銜、木芯鉄板張壺鐙、鉄製鉸具、金具類等が出土している。

本例のような薄板状の鉄製品としては、障泥金具の可能性も考えられる。愛宕塚古墳からは、障泥釣金具ではないかと報告されている円形の金具が出土している。しかし、障泥金具には鋲孔が存在するはずであるが、１．２の鉄製品とも、鋲孔は認められなかった。また、２は、中央で稜をなして、長軸と直交方向に屈曲しており、このような形状もまた障泥金具では考えにくい。ここでは、不明鉄製品として紹介し、多くのご教示を賜りたい。

なお、本遺物については、平成19年度に保存処理を行った。

（引用文献）

八尾市立歴史民俗資料館 1994『河内愛宕塚古墳の研究』



第26図　愛宕塚古墳出土不明鉄器実測図（1 ／ 2）

３．考察

考察１　「高安千塚」郡川16号墳のミニチュア炊飯具副葬の意義について

ミニチュア炊飯具は、畿内の古墳時代後期、古墳に副葬される炊飯具形土器を模したミニチュアの土製品であり、その種類には、竈、甕、鍋、甑等を模したものがみられる。畿内でも滋賀県で特に多く出土し、大阪府、奈良県、兵庫県、和歌山県、三重県で出土している。（卜部行弘1991）。ミニチュア炊飯具の古墳副葬の意義については、水野正好氏が滋賀県大津北郊の古墳群出土例をもとに、漢人系渡来人との関係を指摘されている（水野正好1969 ）。郡川16号墳では、竈と鍋のミニチュア炊飯具が１点ずつ出土しており、竈については、主に生駒西麓地域に分布する曲げ庇系の竈であることが指摘されている（中西克宏1999）。

ここでは、高安古墳群集中地域、「高安千塚」の郡川16号墳のミニチュア炊飯具副葬の意義について検討するため、河内の群集墳で出土するミニチュア炊飯具のありかたをみてみたい（32頁一覧表）。河内の四大群集墳ともいわれる八尾市の「高安千塚」、柏原市の平尾山古墳群、河南町・太子町の一須賀古墳群、東大阪市の山畑古墳群のうち、「高安千塚」では郡川16号墳を含めて２例、平尾山古墳群では２例、一須賀古墳群で15例のミニチュア炊飯具を確認している。山畑古墳群とその周辺では、まったく出土していない。圧倒的に一須賀古墳群での出土例が多いが、「高安千塚」では、発掘調査された古墳が極めて少ないこと、平尾山古墳群では総数1407基の古墳のうちで発掘調査がなされ、副葬品が明らかな古墳は40基程度である点を考慮にいれる必要がある。渡来系の要素が指摘される「高安千塚」、平尾山古墳群、一須賀古墳群において出土し、山畑古墳群では出土していない点が注意される。ミニチュア炊飯具は、河内以外の地域でも、滋賀県大津市北郊付近、奈良県の桜井・飛鳥周辺、葛城山東麓等の限定された地域の群集墳や古墳から出土している。このことからも独自の葬送習慣をもった渡来系集団によって造墓された古墳の副葬品であることが想定されるのである。

「高安千塚」、平尾山古墳群、一須賀古墳群における出土例をみると、MT15～ＴＫ209型式期の須恵器を出土する古墳から、ミニチュア炊飯具が出土しており、そこには、大きく見て二つの特徴がある。一つ目は、石室規模が大きく、副葬品も豊かな古墳を含むということである。「高安千塚」の郡川16号墳は、玄室床面積が11㎡を計る右片袖式石室であり、銅芯銀張鍍金製とみられる耳環が出土している。この玄室床面積11㎡は、「高安千塚」の玄室規模が判明している石室127基中16番目の大きさである。また平尾山古墳群の平野・大県第20支群３号墳は、玄室床面積10㎡を計る両袖式石室であり、単龍環頭柄頭が出土している。この玄室床面積10㎡は、平尾山古墳群の玄室規模が判明している石室158基中９番目の大きさである。また、一須賀古墳群ではＷＡ１号墳が玄室規模16.9㎡を計る一須賀古墳群中最大の両袖式石室墳であり、金銅製沓、冠帽などの豊富な副葬品が出土している。さらにＷＡ 11 号墳は、玄室規模14㎡を計る右片袖式石室で、銀環、馬具等が出土している。そして、ＷＡ 19 号墳は、玄室規模13.2㎡を計る右片袖式石室である。このことは、これらの古墳群では、群中の最有力層がミニチュア炊飯具を副葬していることを示しているとみられる。さらにこれらの古墳は、ＷＡ 19 号墳を除いては、ＭＴ15～ＴＫ10 型式期、６世紀前半から中葉の築造であり、それぞれの古墳群の造墓の早い段階での最有力層の古墳であることが注意される。

二つ目の特徴は、石室規模は中・小規模であるが、比較的早い段階の造墓で、ミニチュア炊飯具以外の渡来系要素の強い副葬品を有する古墳が多いということである。平野・大県第10支群第１号墳は、玄室規模6.23㎡の右片袖式石室であるが、ＴＫ10型式期、６世紀中葉頃の石室であり、金銅製釵子、銀製指輪が出土している。また、一須賀古墳群では、Ｂ７号墳が玄室規模6.8㎡の右片袖式石室であるが、ＴＫ10型式期、６世紀中葉頃の築造であり、金銅製垂飾付耳飾、銀製空玉等が出土している。またＩ８号墳は玄室規模6.93㎡の右片袖式石室であるが、ＴＫ10型式期、６世紀中葉頃の石室であり、銀製指輪等が出土している。またＩ９号墳は玄室規模5.27㎡の右片袖式の石室であるが、６世紀前半頃の石室で、銀製釵子、銀線等が出土している。

「高安千塚」の郡川16号墳は、６世紀前半から中頃に造られた古墳群中で最古の石室であり、ミニチ

ュア炊飯具以外に、韓式系土器を有し、渡来系要素が強く認められる点が注意される。

このことから「高安千塚」、平尾山古墳群、一須賀古墳群では、６世紀前半から中頃の造墓開始の早い段階から渡来系集団の有力層が主体的に造墓を行ったとみられ、これらの古墳群の造墓が、渡来系氏族によって開始されたことを示唆するものと考えられる。

その後の段階においても、これらの古墳群に引き続き、渡来系要素が認められるかどうかについてが問題となるが、一須賀古墳群においては、６世紀後半以降の玄室平面プランが長方形の畿内型石室になっても、引き続いてミニチュア炊飯具をはじめとする渡来系の副葬品が認められ、継続した渡来系集団の関わりを伺うことができる。「高安千塚」では、郡川16号墳の石室にみられるドーム状天井を有し、玄室平面プランが方形の石室は、郡川16号墳に続く時期の服部川19号墳・同20号墳、大窪・山畑21号墳・同22号墳がみられるが、６世紀後半段階なると典型的な畿内型の横穴式石室が盛行する。渡来系の副葬品については、発掘事例が極めて少ないこともあり、大窪・山畑18号墳において、ＴＫ10新段階頃の須恵器片とともに、甕形のミニチュア炊飯具１点を確認しているのみである。平尾山古墳群においては、５世紀後半の高井田山古墳の後は、両袖式で最も古いと考えられている６世紀中頃の平野・大県第20支群３号墳の石室が、大和の大型横穴式石室の影響を受けたものであることが指摘されており（安村俊史2008)、６世紀後半の段階には、長方形と方形の玄室プランの二系統があるようだが、概ね畿内型石室が主体となっているものとみられる。そして６世紀後半段階においては、平野・大県17－１号墳・同17－２号墳、同27－１号墳、雁多尾畑６－13号墳等において、鈒子が出土し、渡来系副葬品が認められる。

このような状況について、花田勝広氏は「大和・河内では、６世紀の群集墳に鈒子・ミニチュア炊飯具の高い副葬率の一群は認められるものの、畿内型石室Ａ類が主体となった様式であり、志賀古墳群のＢ類に類似する石室は量的に少ない。」とされ、渡来系色の強い副葬品を持ちながらも、大津市北郊の志賀古墳群のように、方形や横長方形プランの持ち送りの強い石室を６世紀後半まで持ち続ける古墳群との違いを指摘されている。そして畿内中枢部では、渡来系氏族を分散的に従来の有力氏族の構成員として掌握したため、この統括氏族による規制が強かったという考えを示されている(花田勝広 1993)。

「高安千塚」、平尾山古墳群、一須賀古墳群においては、渡来系氏族がそれぞれの古墳群の造墓開始に主体的に関わったことは確かであろう。その後、古墳群中の石室形態が畿内型石室を主体とするものになっていくことは、当初の造墓集団の性格が、畿内中枢政権との関わりのなかで、変質化していったことを示すものとも考えられる。その変質化の要因として、花田氏が指摘される畿内中枢部における渡来系氏族の有力氏族の構成員としての掌握という考えは、重要な示唆に富むものと考えられる。おそらくこの有力氏族とは、畿内中枢政権を一翼を担った集団であったとみられる。

一須賀古墳群では、畿内型石室が主体となる６世紀後半においても、渡来系の副葬品が認められ、畿内中枢政権と強いつながりをもちながらも、渡来系集団としてのアイデンティティを保ち続けたものとみられる。「高安千塚」においては、６世紀後半段階においても渡来系の副葬品が引き続き認められるのか否かは、現段階では判然としないが、今後、出土事例の検討や石室形態の変遷の分析を進め、その具体的な様相を明らかにしていく必要があろう。今後の課題としたい。　（吉田野乃）

(引用文献)
卜部行弘1991「その他　土製品」『古墳時代の研究８古墳Ⅱ　副葬品』雄山閣
水野正好1969「滋賀県郡在所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』第４冊
中西克宏1999「曲げ庇系竈を副葬する古墳」『光陰如矢－荻田昭次先生古稀記念論集』「光陰如矢」刊行会
安村俊史2008『群集墳と終末期古墳の研究』清文堂
花田勝広1993「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』第39巻第４号
(出土一覧表引用文献)
（１）　八尾市教育委員会1994『八尾市内遺跡平成５年度発掘調査報告書』
（２）　柏原市教育委員会1993『柏原市遺跡群発掘調査概報1992年度』
（３）　柏原市教育委員会1998『平野・大県古墳群－高尾山創造の森に伴う調査　その２　1997年度』
（４）　大阪府立近つ飛鳥博物館2004『一須賀古墳群の調査』
（５）　大阪府教育委員会1992『一須賀古墳群資料目録Ⅰ　土器編』
（６）　大阪府教育委員会1984『一須賀・葉室古墳群』

古墳群	古墳名	出土器種	共伴須恵器型式等	出土位置	石室形式	石室規模	墳丘規模	備考	文献
高安古墳群集中地域（高安千塚）	郡川16号墳	竈・鍋	（ＭＴ15）～ＴＫ10古段階	鍋は羨道付近か（追葬時片づけの可能性もあり、原位置不明）	右片袖式	石室長8.2m 玄室長3.9m 玄室幅2.8m （玄室床面積10.92㎡）	直径15m 円墳	耳環・韓式系平底鉢出土	本報告
	大窪・山畑18号墳	甕	ＴＫ10（新）	玄室北東隅付近	不明	玄室残長3.0m 玄室幅2.3m	不明	石室は半壊状態	(1)
平尾山古墳群	平野・大県第20支群3号墳	竈	ＭＴ15～ＴＫ10（追葬時ならＴＫ43～（TK209）	羨道中央（追葬時かたづけか）	両袖式	石室長11.4m 玄室長4.0m 玄室幅2.5m （玄室床面積10㎡）	直径26m 円墳	環頭太刀、須恵器装飾椀・蓋セット出土	(2)
	平野・大県第10支群1号墳	竈・釜（一体型）甕・甑・鍋・瓶・鉢	TK10古段階	玄室内奥壁中央やや西側	右片袖式	石室長5.12m 玄室長3.37m 玄室幅1.85m （玄室床面積6.23㎡）	直径10m前後 円墳	青銅製鍍金張釵子・銀製指輪・須恵器子持ち器台出土	(3)
一須賀古墳群	ＷＡ－1号墳	竈・鍋	TK10新段階・TK209	玄室内	両袖式	石室長15m 玄室長6.5m 玄室幅2.6m （玄室床面積16.9㎡）	直径30m 円墳	金銅製沓、冠帽、太刀把頭出土	(4) (5) (6)
	ＷＡ－6号墳	竈・甑・鍋・甕	TK10新段階・（TK43）	玄室内	両袖式	石室長6.7m 玄室長3.2m 玄室幅1.8m （玄室床面積5.76㎡）	直径15m 円墳	須恵器子持ち器台出土	
	ＷＡ－11号墳	竈・甑	TK10古段階・（TK209）	玄室内	右片袖式	石室長7.78m 玄室長4.34m 玄室幅3.24m （玄室床面積14㎡）	直径20m 円墳	馬具・銀環・ガラス玉・韓式系平底鉢出土	
	ＷＡ－19号墳	竈・甑	～TK217		右片袖式	石室長10m 玄室長6m 玄室幅2.2m （玄室床面積13.2㎡）	直径20m 円墳		
	ＷＡ－20号墳	竈・甑	TK209	玄室内	右片袖式	石室長6.5m 玄室長3.1m 玄室幅1.36m （玄室床面積4.2㎡）	直径13m 円墳		
	Ｂ4号墳	竈	TK10新段階	玄室内	右片袖式	石室長6.7m 玄室長3.4m 玄室幅2.15m （玄室床面積7.31㎡）	不明		
	Ｂ7号墳	鍋・甑	TK10古・TK10新	玄室内	右片袖式	石室長6.95m 玄室長3.25m 玄室幅2.1m （玄室床面積6.8㎡）	直径12～14m 円墳	金製垂飾付耳飾・銀環・銀製空玉・硬玉製勾玉・琥珀製棗玉・ガラス玉・銀張柄鉄刀子など出土	
	B14号墳	甑	TK10古段階		右片袖式	石室長5.3m 玄室長2.9m 玄室幅1.7m （玄室床面積4.93㎡）	直径13m 円墳	須恵器子持ち器台・鉄鏃出土	
	Ｅ1号墳	甑	TK43・TK217		右片袖式	石室長6.8m 玄室長2.8m 玄室幅2.2m （玄室床面積6.16㎡）	直径11～12m 円墳		
	Ｌ4号墳	竈・甕	TK43・TK217		右片袖式	石室長8.5m 玄室長3.6m 玄室幅2.3m （玄室床面積8.28㎡）	直径18m 円墳		
	Ｏ5号墳	竈・甕（一体型）・甑	（TK43）～TK209	玄室奥壁北東隅	左片袖式	石室長6.45m 玄室長3.45m 玄室幅2.0m （玄室床面積6.9㎡）	直径18m 円墳	金環・鉄刀出土	
	Ｑ1号墳	竈・甕・甑	TK43か	玄室奥壁付近	左片袖式	石室長7.1m 玄室長3.3m 玄室幅1.8m （玄室床面積5.94㎡）	直径21m 円墳		
	Ｑ9号墳	竈・甕	TK43・TK209	玄室内袖部	右片袖式	石室長7.2m 玄室長2.9m 玄室幅1.5m （玄室床面積4.35㎡）	直径15m 円墳	須恵器装飾椀・蓋セット・環付六花形環金具出土。	
	Ｉ18号墳	鍋	（TK10新段階）	玄室内北西隅付近	右片袖式	石室長5.6m 玄室長3.3m 玄室幅2.1m （玄室床面積6.93㎡）	直径12m 円墳	金環・銀環・銀製指輪・ガラス小玉・馬具・刀子・鉄鏃出土・	
	Ｉ19号墳	竈・鍋	6世紀前半	玄室内	右片袖式	石室長4.7m 玄室長3.1m 玄室幅1.7m （玄室床面積5.27㎡）	直径12m 円墳	銀製釵子・銀線出土	

高安古墳群集中地域・平尾山古墳群・一須賀古墳群におけるミニチュア炊飯具出土例

考察２　高安古墳群における刻み目状調整等を有する須恵器について（第27図）

今回、整理を行った高安古墳群郡川16号墳・黒谷13号墳の須恵器には、口縁端部に刻み目状調整や内面に同心円文状スタンプを有する坏蓋がみられ、坏の内面中央の最終調整に静止ナデが明瞭に認められるものが、多く見られた。

口縁端部に刻み目状調整を有する須恵器については、大阪府日置荘遺跡Ｌ－１須恵器窯出土遺物（ＴＫ10型式）・Ｐ－１須恵器窯出土遺物（ＴＫ10新段階～ＴＫ43型式）を検討された江浦洋氏が、陶邑窯跡群においても確認できるが、むしろその北側と東側に展開する周辺地域に分布が集中することを指摘されている（江浦洋1995）。また消費地では、陶邑窯跡群の東側に展開する一須賀古墳群をはじめとする周辺の古墳群で確認できることに注意され、群集墳盛行期に陶邑窯跡群の周辺で新たに造られた須恵器窯の一つとして陶邑北側周辺部の須恵器窯と一須賀古墳群との関連性を指摘されている。

また、秋山浩三氏は、乙訓の６世紀中頃の前方後円墳である物集女車塚出土須恵器の産地推定のなかで、坏内面中央の最終調整の静止ナデ、同心円文スタンプ等の調整の特徴とともに、口縁端部に刻み目状調整を有する須恵器について取り上げられ、大阪北部の千里窯跡群との関連性を指摘されている（秋山浩三2007）。千里窯跡群については、藤原学氏が坏の内面中央の最終調整に静止ナデを主体とすることが陶邑窯跡群本体とは異なる特徴として指摘されている（藤原学2001）。秋山氏は陶邑周辺部須恵器窯と千里窯跡群の須恵器の技法上の共通性も指摘されている。

今回、整理した遺物では、郡川16号墳から口縁端部に刻み目状調整を有する坏蓋１点（12）、内面に同心円文状スタンプを有する坏蓋１点（７）があり、内面中央の最終調整に静止ナデを行う坏蓋が４点（２．４．７．12）、同様の坏身が４点（14．16．19．22）確認できた。また、黒谷13号墳で子持ち器台（1）の子持ち部の坏蓋のうち１点（１－②）に口縁端部の刻み目状調整を確認しており、この子持ち器台の遺存していた坏蓋・坏身のすべての内面中央には、最終調整の静止ナデが確認できた。

さらに、他の高安古墳群出土事例では、楽音寺８号墳に、坏蓋１点に口縁端部に刻み目状調整とみられるものが確認でき、坏蓋３点・坏身３点の内面中央に最終調整の静止ナデが確認できた（35頁表）。

高安古墳群においては発掘調査事例が少ないにも関わらず、先学の指摘された陶邑北側周辺部須恵器窯で多く見られる特徴をもつ須恵器が、しばしば確認されることは注意される。このことは江浦氏の指摘を鑑みれば、地理的な近さからも一須賀古墳群等と同様に６世紀中頃から後葉にかけて爆発的に造墓された高安古墳群と陶邑窯跡群周辺で新たに造られた須恵器窯との関連性が想定できるものである。

これに関連して注意される点として、黒谷13号墳には、金属器の模倣須恵器とされ、明らかに他の須恵器とは異なる丁寧なつくりの装飾椀（６・７）があり、２点とも底面に「―」印のヘラ記号が認められる。「―」印のヘラ記号は黒谷13号墳の坏身にもみられる。日置荘遺跡Ｌ－１須恵器窯出土の坏のヘラ記号は、「―」印のヘラ記号が他を凌駕して多くみられると報告されている。しかし、生産地では須恵器の装飾椀は確認されておらず、またこのヘラ記号が日置荘遺跡Ｌ－１須恵器窯をはじめとする陶邑北側周辺部の須恵器窯に多いということも確認されているわけでもない。このため憶測の域をでないが、須恵器の装飾椀は、限られた古墳に副葬される特異な器種であり、これの製作を専門とする工人集団の存在が想定されることからも、陶邑窯跡群の周辺で新たに造られた須恵器窯との関連性が注意されるところである。今後の出土事例の増加に注意していきたい。　（吉田野乃）

※脱稿後に大石古墳（楽音寺７号墳）の須恵器有蓋高坏蓋３点の内面にも静止ナデが行われている事を実見において確認した。

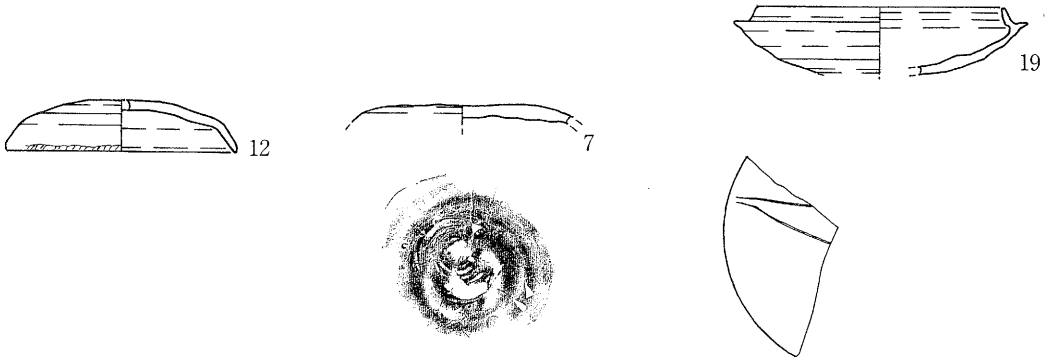
（引用文献）

江浦洋1995「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡　分析・考察編』大阪府教育委員会　（財）大阪文化財センター

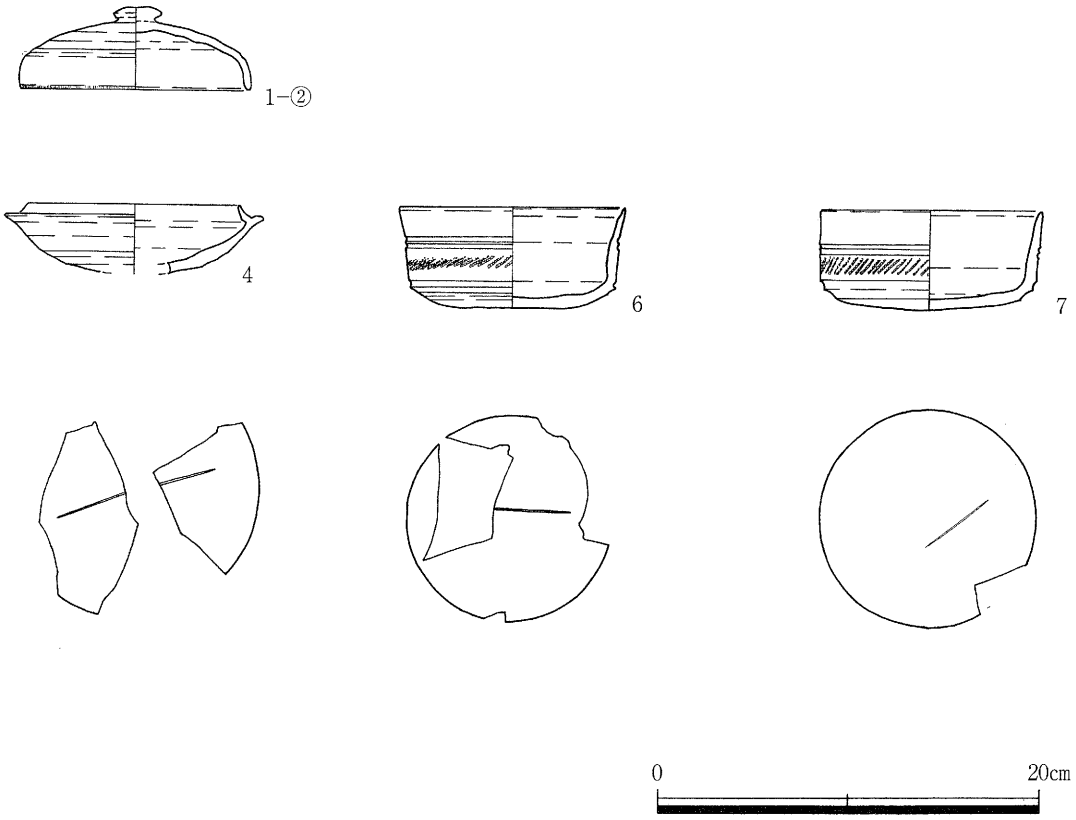
秋山浩三2007「物集女車塚の須恵器産地推定・補遺」『明日をつなぐ道－高橋美久二先生追悼論集』

藤原学2003「群集墳と群集窯－八十塚古墳群出土須恵器と周辺の生産地の関連から－」『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究室

郡川16号墳



黒谷13号墳



第27図　刻み目、スタンプ文、ヘラ記号を有する須恵器（1／4）

古墳名	図面番号	器種	口縁端部刻み目状調整	同心円文スタンプ	ヘラ記号（　印）	坏身・坏蓋最終調整の静止ナデ	須恵器型式	文献
郡川16号墳	第12図2	坏蓋				○	(MT15)～TK10	本報告掲載
	第12図4	坏蓋				○	TK10古	
	第12図7	坏蓋		○		○	TK10か	
	第12図12	坏蓋	○			○	TK43～TK209	
	第12図14	坏身				○	TK10古	
	第12図16	坏身				○	TK10古	
	第12図19	坏身			○	○	TK10新	
	第12図22	坏身				○	TK209	
黒谷13号墳	第21図1	子持ち器台	○（子持ち部坏蓋1－②）			○（子持ち部坏身・坏蓋すべて静止ナデ）	TK10新～TK43	
	第21図2	坏蓋				○	TK10新	
	第21図4	坏身			○（一）	○	TK43	
	第21図5	坏蓋				○	(TK43)～TK209	
	第21図6	装飾椀			○（一）		TK43～TK209	
	第21図7	装飾椀			○（一）		TK43～TK209	
楽音寺8号墳	第50図4	坏蓋				○	TK43	八尾市教育委員会2007『平成18年度発掘調査報告書』
	第50図7	坏蓋				○	TK43	
	第50図11	坏蓋	○？				TK43	
	第50図15	坏蓋			○（×）	○	TK43	
	第50図18	坏身				○	TK209	
	第50図28	坏身			○（三）	○	TK209	
	第50図30	坏身				○	TK217	

高安古墳群内古墳の刻み目状調整等を有する須恵器一覧表

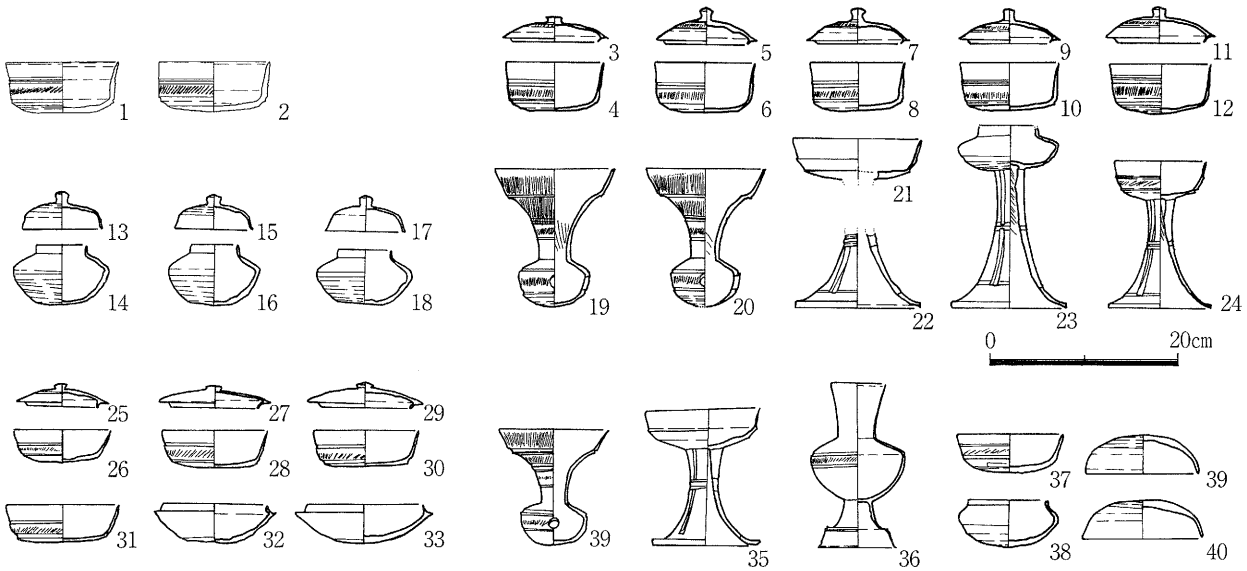
考察３　黒谷13号古墳出土の須恵器装飾椀について

本稿で取り上げる須恵器が採集された黒谷13号墳は、昭和37年の工事に伴って消失しており、その詳細は分かっていない。そこで、この古墳から採集された特異な須恵器から黒谷13号墳について考えてみたい。

第28図１・２が採集された椀である。平底で体部に２条の沈線と列点文が巡り、底部と体部の境にも沈線が巡っている。外面底部は丁寧なロクロヘラケズリがなされ、全体にシャープな印象を受ける。

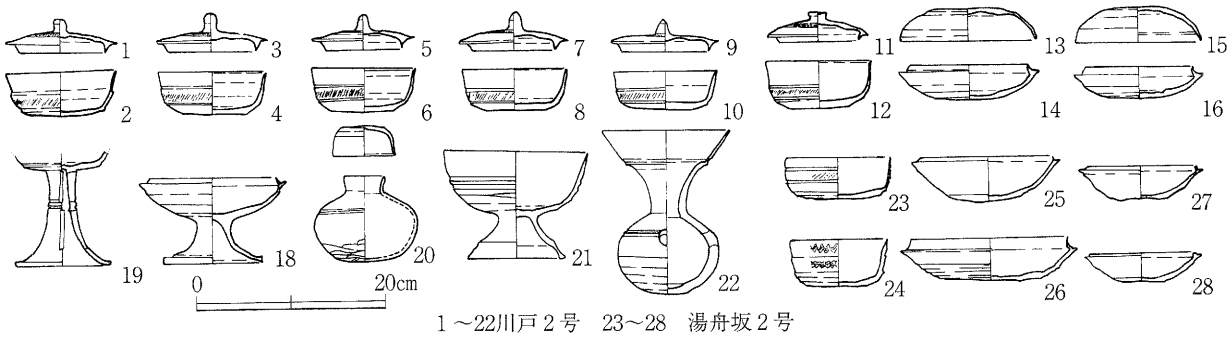
本例のような体部に文様を持つ特異な椀は宇垣匡雅氏により集成が行われている(宇垣匡雅1995)。本稿では宇垣氏に従い、須恵器装飾椀と称しておく。装飾椀は兵庫県三田市平井遺跡出土例と奈良県龍王山古墳群内の遺物包含層出土例を除き、すべて古墳からの出土である（表1)。高安古墳群周辺の古墳では大阪府平尾山古墳群平野・大県第20支群３号墳、大阪府一須賀古墳群Ｑ支群９号墳、龍王山古墳群Ｅ-３号墳から出土している。

まず製作時期について検討を行う。第28図の３～40に挙げたのは平尾山古墳群平野・大県第20支群３号墳、一須賀古墳群Ｑ支群９号墳、龍王山古墳群Ｅ-７号墳出土の須恵器である。平野・大県第20支群３号墳では装飾椀５個体が出土している。この石室内の土器は２群に分けられ時期差を持っている。図示した装飾椀を含む一群は、瑯の口縁部の形態や、無蓋高坏の脚部の透かしからTK43型式期であると考える。一須賀古墳群Ｑ支群９号墳では装飾椀４個体が出土している。石室内出土須恵器には、32のような比較的小型化した坏身もあるが、33のような口径約12cmの個体もある。４体の埋葬が確認されていることから追葬がなされたと考えられる。出土須恵器はTK43型式期～TK209型式期までを含んでいると考える。龍王山古墳群Ｅ-７号墳は竪穴式小石室を持つ古墳であり、追葬は考えにくい。装飾椀と須恵器坏蓋２個、須恵器壺が共伴している。共伴した坏蓋は、口径が12cm程度であり、TK209型式期と考えられる。



1・2　黒谷13号　3～24　平野・大県20支群3号
25～36　一須賀Q支群9号　37～40　龍王山E-7 号

第28図　黒谷13号墳と周辺古墳出土の装飾椀を伴う須恵器（S=1／8、36のみ S=1／10）



1～22川戸２号　23～28　湯舟坂２号

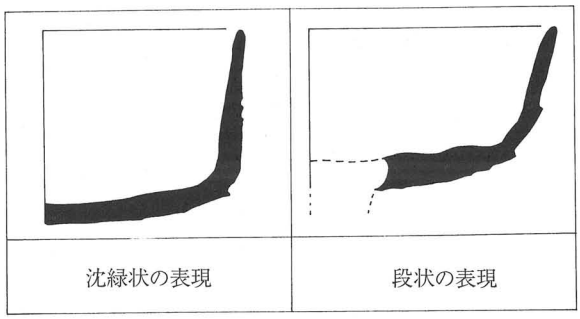
第29図　畿外の古墳出土の装飾椀を伴う須恵器（S=1／8）

府県名	遺跡名	出土須恵器の型式	石室全長×玄室幅（m）		個数	蓋	沈線表現	段状表現	文献
岡山	赤井南４号墳	TK43～TK209	8.7	1.6	1	無	1		1
岡山	王墓山古墳	～TK43			4	有	4		1
岡山	川戸２号墳	TK209	12.35	2	6	有	5	1	2
兵庫	ヤクチ２号墳	MT85～TK209	10.7	1.8	1	無	1		3
兵庫	高川１号墳	TK43～TK209	5	1.5	1	無	1		4
兵庫	平井遺跡	TK43～TK209			2	無	2		5
京都	湯船坂２号墳	TK43～TK217	11.8	2.9	2	有	1	1	6
大阪	黒谷13号墳	TK10～TK217			2	無	2		
大阪	平尾山平野大県第20支群３号墳	TK43～TK209	11.4	2.5	5	有	5		7
大阪	一須賀Ｑ群９号墳	TK43～TK209	7.2	1.5	4	有	2		8
奈良	龍王山Ｅ－７号墳	TK209	1.79	0.58	1	無	1		9
奈良	龍王山包含層				1	無	1		9
鳥取	寺内８号墳								10

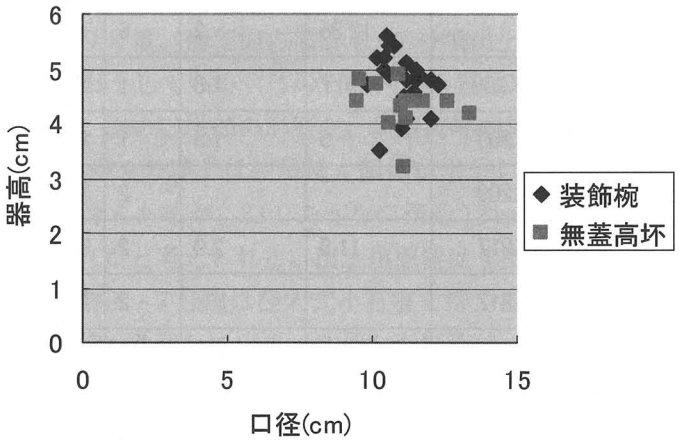
表１　装飾椀出土例一覧表

（表中文献）

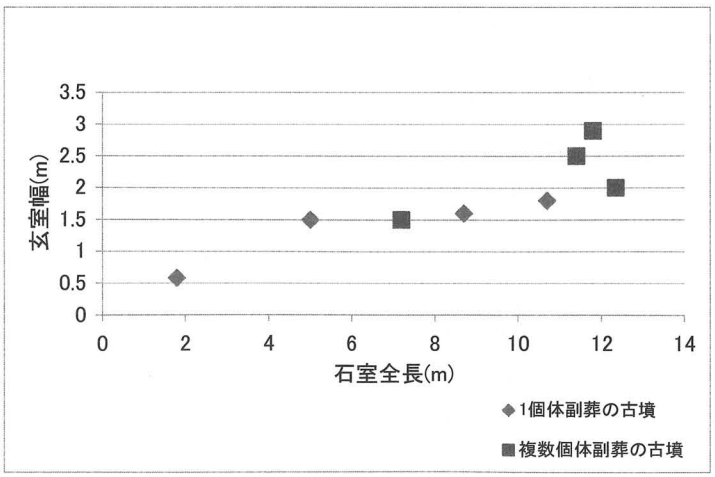
1 藤田憲司・間壁忠彦他 1974『倉敷考古館集報』10
2 宇垣匡雅 1995「第６章　考察」『川戸古墳群』
3 加西市教育委員会 1985『ヤクチ古墳群』
4 兵庫県教育委員会 1991『高川古墳群・近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書・』
5 兵庫県教育委員会 1987『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（1)』
6 久美浜町教育委員会 1983『湯舟坂２号墳』
7 柏原市教育委員会 1993『柏原市遺跡群発掘調査概報 1992 年度』
8 大阪府教育委員会 1984『一須賀・葉室古墳群』
9 橿原考古学研究所 1993『龍王山古墳群』
10 宇垣匡雅 1995「第６章　考察」『川戸古墳群』



第30図　装飾椀と無蓋高坏の断面図



第31図　装飾椀と無蓋高坏坏部の法量



第32図　石室規模と装飾椀の副葬数

これらの例から、黒谷13号墳の装飾椀も、TK43～TK209型式期に製作されている可能性が高い。黒谷13号墳の須恵器は初葬時とみられるTK10型式期新段階に属する個体が最も古く、古墳の築造時期と矛盾しない。装飾椀はTK43～TK209型式期の追葬時（6世紀後半）に伴うものであろう。

次に畿外の例も見ておく（第29図）。岡山県川戸2号墳では初葬時に副葬された土器群の中に位置づけられ、報告書ではＴＫ209型式期に位置づけられている。筆者もその時期であると考える。京都府湯舟坂2号墳では2個体の装飾椀が出土している。1個体は体部に波状文が施される。TK43～TK217型式期までの須恵器が出土している。報告書に従えば、装飾椀の内1点は出土位置から6世紀後葉に位置づけられる。他の古墳の例もTK43～TK209型式期に位置付け得るであろう。

河内地方での出土例は、外面体部に沈線と列点文が施され、丸みを帯びたセットとなるのに対して、湯舟坂2号墳などでは異なる文様が施される個体があり、また川戸2号墳では扁平な蓋がセットとなる。一箇所で製作されたものではなく、各地で個別に製作されたとする宇垣氏の説が妥当であろう。ただし、地域ごとの時期差は少なかったと考えられる。

このような装飾椀の出現する背景として、藤川智之氏は無蓋高杯の杯部が祖形になったとした（藤川智之1993）。この説を発展させる形で、内山敏行氏は金属器模倣須恵器が無脚化してゆく過程に連動して、無蓋高坏の脚部が取り外されて成立したものとした（内山敏行1997）。また、菱田哲郎氏は装飾椀を出土銅鋺の無台形式金属器の模倣須恵器としている（菱田哲郎2007）。

装飾椀は一見すると須恵器無蓋高杯の脚部を無くしたような器形である。しかし装飾椀と表1に掲載した遺跡で出土した無蓋高杯の杯部の法量を比較すると、装飾椀が大きい場合が多いことがわかる（第31図）。また、装飾椀と有紐かえり付きの蓋が組み合う事例が多いことは、装飾椀が単純に無蓋高坏の脚部を外した器種ではないことを示す。また、蓋のつまみで銅鋺に組み合う蓋のつまみに類似するものがあることは既に指摘されている（宇垣匡雅1995）。さらに無蓋高杯で段状に表現される体部の凹凸は、装飾椀では沈線として表現されている例が多い（第30図）。沈線は金属器の轆轤目を表す手段として使われることが知られている。このような特徴から、装飾椀は、須恵器の無蓋高杯と金属器双方の影響を受けたものと考えられる。

装飾椀が出土した古墳の石室規模は様々である。しかし平野・大県第20支群3号墳や湯舟坂2号墳など大規模な石室を持つ例が多いことが指摘できる。黒谷13号墳と同じく装飾椀が複数副葬される古墳は、一須賀古墳群Ｑ支群9号墳を除けば、石室規模が大きい事例が多い。よって、黒谷13号墳の石室も比較的規模の大きいものであったと推測される。石室規模が被葬者の階層を表すならば、黒谷13号墳の被葬者は比較的階層の高い人々であったと考えられる（第32図）。

本稿をなすにあたって、野島智美氏、横田真吾氏から、御教示や文献のご配慮を賜りました。末筆ではありますが、御芳名を記して感謝申し上げます。

（森暢郎）

（引用文献）

宇垣匡雅 1995「第6章考察」『川戸古墳群』

藤川智之 1993「古墳時代須恵器椀・台付椀の検討」『真朱』2

内山敏行 1997「手持食器考　- 日本的食器使用法の成立 - 」『HOMINIDS』1

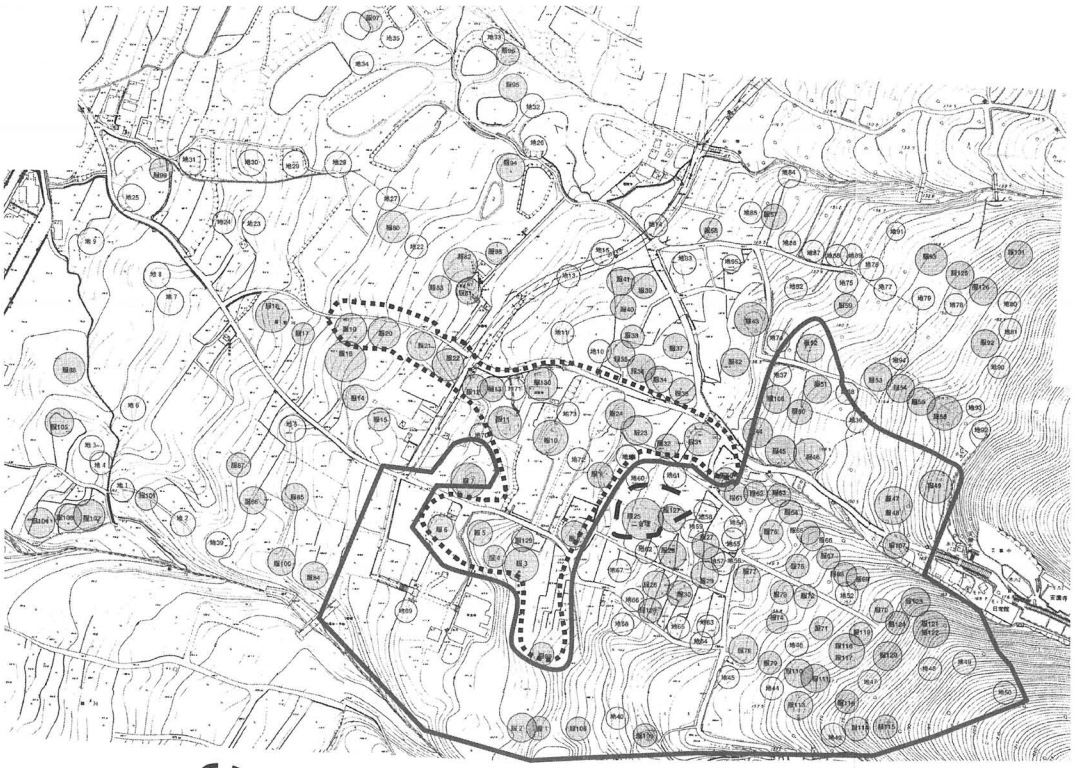
菱田哲郎 2007「第4章律令制下の産業政策」『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会

Ⅲ.高安古墳群服部川支群東側地区測量調査報告（第34図・別折添付第35図）

八尾市教育委員会では、平成16年度から高安古墳群の保存・活用事業として基礎的な調査を行ってきたが、本年度と来年度の二ヵ年は、最も古墳の集中する服部川支群について測量調査を実施することとした。本年度は、服部川支群の東側地区の範囲（第33図）について行った。測量は（株）相互技研に委託して平成20年8月18日～平成21年3月末までの期間で行った。測量図作成の方法としては、大阪府砂防オルソマップデータをベースとし、古墳部分53箇所について、現地で1/250縮尺の測量図作成を行った。また服部川12号・13号・21号墳については、平成18年度に行われた大阪府農免農道工事に伴う発掘調査において、(財)八尾市文化財調査研究会による測量（縮尺1/100）が行われていたため、このデータを提供いただいて図面に取り込んだ。また、昭和42年度には、大阪府教育委員会により神光寺周辺の古墳の測量が縮尺1／100で行われていたため（大阪府教育委員会1968)、これについても大阪府教育委員会の許可をいただいて測量図を取り込んでいる。このため大阪府教育委員会による測量がなされた服部川3号～6号墳、8～11号墳、19～21号・23号・24号・31号・32号・89号・129号・130号墳については、昭和42年度当時の古墳の状況を示すものとなっている。特に服部川3号～6号墳、8号墳、10号墳は現在では墳丘裾部に石垣等が巡らされた状態となっている。また服部川130号墳については、現在、建物が建っており、墳丘は完全に消失した状態となっている。今回作成した測量図には、石室と墳丘のライン、古墳状地点の範囲を入れている。石室ラインについては、現地で地表に現れていない部分については、花田勝広氏による石室実測図（花田勝広2008）を参考にして記入した。また、墳丘ラインについては、詳細分布調査の台帳を参考に、今回の測量図から推定したラインを記入している。

今回作成した測量図によって、高安古墳群集中地域服部川支群の古墳の詳細な立地状況を示すことができた。来年度に行う西側地区の測量図と合わせて、高安古墳群集中地域の服部川支群のありかたの検討材料としていくとともに、今後の保存計画の基礎資料としていきたい。

(引用文献)
大阪府教育委員会1968『八尾市高安群集墳の調査（第2次）－昭和42年度服部川その他地区調査概要－』



本年度八尾市測量範囲　平成18年度八尾市測量範囲　大阪府教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会測量図合成範囲

第33図　測量調査範囲図

第34図 高安古墳群 服部川支群 東側地区 測量図（1/1000）

図版1　郡川16号墳出土遺物

1

3

2

11

14

16

21

22

図版2　郡川16号墳出土遺物

23

31

37

39

40

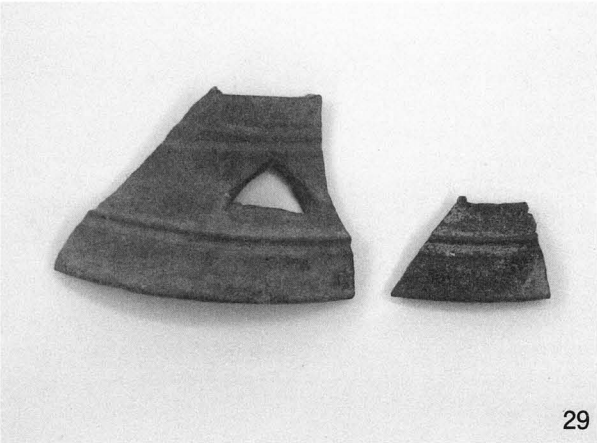
42

41
（正面）

41
（側面）

図版3　郡川16号墳出土遺物

7

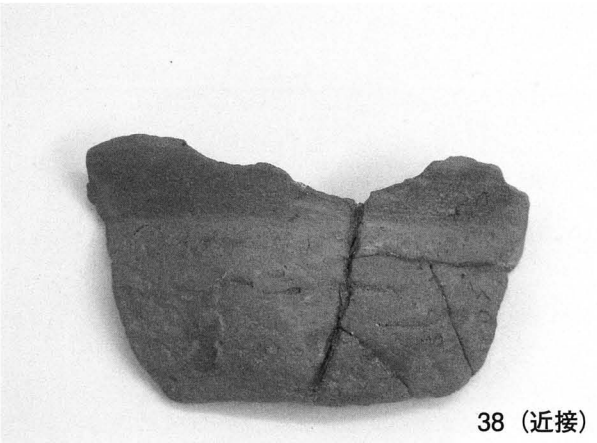


29

33

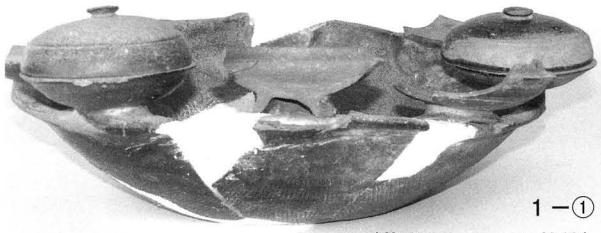
32

38



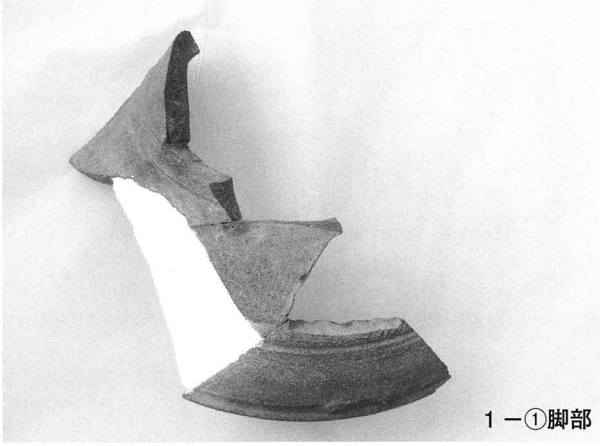
38（近接）

図版4　黒谷13号墳出土子持器台

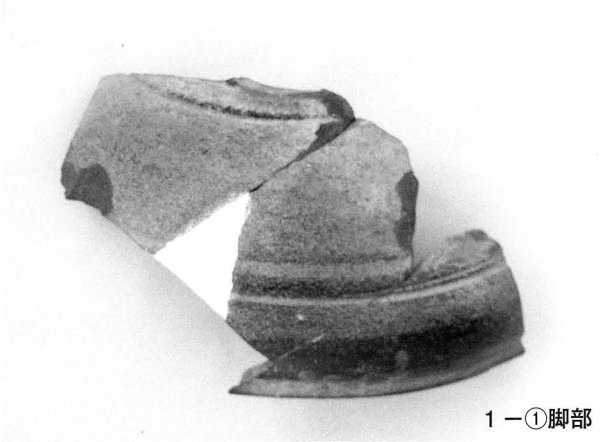


1－①
（蓋をセットした状態）

1－①鉢部



1－①脚部



1－①脚部

1－③

1－④

図版5　黒谷13号墳出土遺物

2

8

6（正位置）

6（底面）

7（正位置）

7（底面）

9

11

図版6　服部川37号墳・不明古墳出土遺物

服部川37号墳1
（A面）

服部川37号墳1
（B面）

服部川37号墳2
（A面）

服部川37号墳2
（B面）

不明古墳 1

不明古墳 2

図版7　出土遺物（鉄製棺釘・鎹）

服部川 37 号墳 3

服部川 37 号墳 4

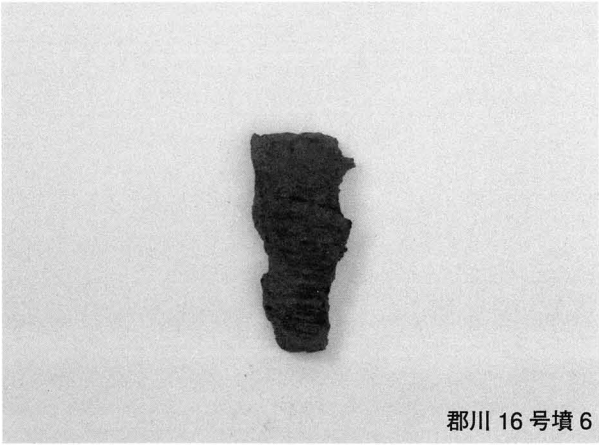
二室塚古墳

郡川 16 号墳 2

郡川 16 号墳 3

郡川 16 号墳 4

郡川 16 号墳 5


郡川 16 号墳 6

図版8　出土遺物（鉄製品・玉）

不明古墳 1

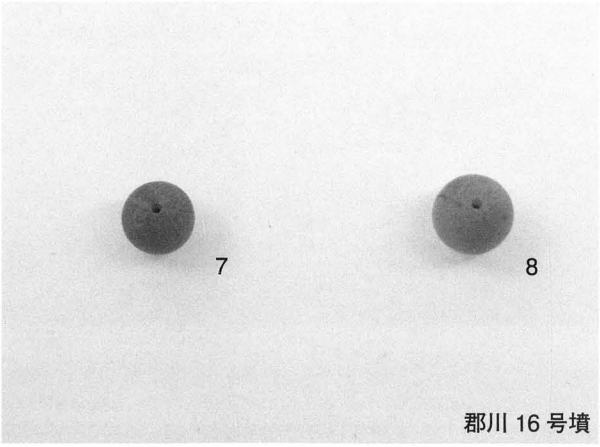
不明古墳 2

不明古墳 3

不明古墳 4

愛宕塚古墳 1

愛宕塚古墳 2



郡川 16 号墳

図版9　耳環・不明鉄製品

郡川 16 号墳（左）・服部川 37 号墳（右）

郡川 16 号墳 1

（上・下写真　八尾市立歴史民俗資料館提供）

報告書抄録	
ふりがな	たかやすこふんぐんちょうさほうこくしょーしゅつどいぶつせいりちょうさ　はっとりがわしぐんひがしがわちくそくりょうちょうさー
書名	高安古墳群調査報告書ー出土遺物整理調査　服部川支群東側地区測量調査ー
副書名	
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	60
編著者名	吉田野乃
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003　大阪府八尾市本町１丁目１番１号　℡０７２－９９１-３８８１
発行年月日	西暦2009年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村　遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
たかやすこふんぐん	やおし						
高安古墳群	八尾市	27212	34 37 40	135 38 28	20080401～20090331		遺物整理
あたごつかこふん	やおしこうだち						
愛宕塚古墳	八尾市神立	27212	34 38 18	135 38 35	20080401～20090331		遺物整理
たかやすこふんぐんはっとりがわしぐん	やおしはっとりがわ						
高安古墳群服部川支群東側地区（測量調査）	八尾市服部川	27212	34 37 30	135 38 42	20080818～20090331	40,000	測量調査（保存目的）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高安古墳群（遺物整理）	古墳	古墳時代	服部川37号墳・二室塚古墳・郡川16号墳・黒谷13号墳・垣内・教興寺17号墳	須恵器・土師器・鉄釘・耳環・ミニチュア炊飯具・韓式系平底鉢・子持ち器台	
愛宕塚古墳（遺物整理）	古墳	古墳時代		不明鉄製品	
高安古墳群服部川支群東側地区（測量調査）	古墳	古墳時代	古墳53箇所		

八尾市文化財報告60　平成20年度国庫補助　高安古墳群等調査事業

高安古墳群　調査報告書

―出土遺物整理調査・服部川支群東側地区測量調査―

発　行　年　　２００９年３月
発　　行　　八尾市教育委員会
　　八尾市本町１丁目１番１号
編　　集　　生涯学習部　文化財課
印　　刷　　㈱近畿印刷センター

〔八尾市刊行物番号　H20－161〕

第35図 高安古墳群 服部川支群 東側地区 測量図（1/500）